

# 白鳥博士小傳

## 目次

- 一 博士の一生とその時代
- 二 少壯時
- 三 史學への志望
- 四 大學在學時代
- 五 東洋史研究のかどいで
- 六 ヨロッパ留學
- 七 大學教授就任、東洋學報創刊、滿鮮史研究機關の設置
- 八 東宮御進講、博士の人格の圓熟
- 九 大學教授退任
- 一〇 東洋文庫
- 一一 薨去
- 一二 幸福の時代、幸福の生

## 一 博士の一生とその時代

いはゆる幕末の幾年かにはじまり明治・大正の兩時代を経て昭和の今年に至る約八十年間は、我が日本が、國史あつてから會てそのためしがなく、廣い世界の歴史の上にもまたたぐひのない、めざましい發展を、あらゆる方面に、して來た時期である。さうして國民のたれもが、多かれ少かれ、この非常の發展にそれく

のはたらきをして來た。わが白鳥博士の一生は恰もこの時期に當り、直接には、我が國の東洋史學の進歩に、間接には、一般史學及びそれと關係のある種々の學問の發達に、大なる寄與をせられたのみならず、延いてはまた、學問をとほして、國威の顯揚に貢獻せられるところが少なくなかつた。博士は我が國の東洋學に世界の學界に於ける特殊の地位を興へ、博士の學問上の業績は支那の學界の一部面にも指導的なはたらきをしたからである。博士の事業は、實に、明治時代の中ころから後の、我が國の史學史の重要な側面をなすものである。博士は慶應元年（西紀一八六五年）二月に生まれ、今昭和十七年（一九四二年）三月に、七十八歳の壽を以て、長逝せられたのである。

## 二 少 壯 時

慶應元年は、當時の主要なる列國との修交條約が締結せられてから七年、横濱が開かれてから六年の後であり、一方では、國內の紛亂にもかゝらず、幕府の努力によつて、ともかくも世界の一國として列國の間に立たうとする態度が明かにせられると共に、他方ではヨーロッパの文物を學びることによつて、國家の富強を計らうとする決意が、ますます固められて來た時である。いはゆる洋學を教授するところとしての江戸の開成所及び長崎の洋學所の施設もやゝ整頓し、留學生も既にヨーロッパに派遣せられてゐた時である。

ヨーロッパの文物を學ぶために必要なことばとして、オランダ語のほかはイギリス語及びフランス語の學習が行はれるやうになつて來た時である。百餘年の前から、いはゆる蘭學者によつて、徐々に植ゑつけられて來たヨーロッパの學問と、次第にひろめられて來た世界の現實の情勢及びその歴史的由來に關するいろ／＼

の知識とが、刻々に新しい形をとつて展開してゆく時勢に刺戟せられた先覺者に、日本の文化と政治との進むべき方向を示唆しつゝあつた時である。博士はこのやうな年の二月四日上總の長柄郡長谷村（今の長生郡茂原町の一部）の農家に、嘉一郎氏の二男として、生れられた。この月は、てうど開成所に理學・化學の二科が設けられ、現代科學が官立の學校に於いて、初めて講習せられるやうになつた月であつた。名は倉吉であるが、博士は常に庫吉の文字を用ゐてゐられた。

目まぐるしい世の動きのうちに時勢は急轉して、慶應三年の冬には維新の鴻業、政體の大變革が行はれ、幕府政治はそれによつて終を告げた。さうして翌四年は明治元年となつた。博士の四歳のときである。このころの知識人の大部分は、いはゆる漢學によつてその思想を養つて來たものであり、その間に國學の感化をうけたものが混在してゐたのであるが、維新の精神を發展させて國家の富強を計るには、幕末時代の趣向を更に進めて、西洋の文物をすべての方面にわたつて學びとらねばならぬ、といふことが、一般に深く感知せられて來たために、いはゆる洋學はます／＼興隆し、少數の識者のことではあつたけれども、それによつて西洋の文物の本質が、徐々に理解せられて來るやうにもなつた。廣く知識を世界に求めることが、これから後の國是となつたことは、いふまでもない。明治政府の基礎が漸く固まつて來るにつれて、教育の制度及びその施設も、この方針の下に行はれた。民間に於いても、洋學を授ける私塾が新知識を求めんとする多數の學生をひきつけた。しかし、知識人の思想の根柢には、漢學によつて與へられた知識が存在し、漢語・漢文が尊重せられ、漢文直譯風の文章が一般に行はれ、漢學を教授する私塾が少なくなかつた。自然科學に關する方面を除く外は、洋學によつて得た知識と、この傳統的のそれとが、互に混合してゐた。これが明治初期

の知識社會の狀態であつた。

このやうな時代の空氣のうちに、博士は郷里において小學校の教育をうけられた。入學せられたのは明治六年の八月であつたから、前年に定められた學制によつて小學校の開設せられた時、もしくはそれからまもない時であつたらう、と推測せられる。博士の九歳の時である。それから、十一年の七月に卒業せられるまでの五年間が、博士の小學校時代であつた。小學校に入學せられる前に、既に隣村の寺小屋に通つて幾らかの教育をうけてゐられたのであるから、小學校の在學の時期は規定よりは短かつたのであらう。そのころの長谷村の小學校が、どのやうな狀態であり、どのやうな教育を施してゐたかは、わかりかねるが、その初期に於いては、一般に草創時代のことであつて、地方の小學校は、半ばは在來の寺小屋をうけつぎ、半ばはアメリカのを翻案したやうな教科書によつて、讀書や習字や算術などを教へてゐたのであるから、長谷村のも、多分その例にはづれてゐなかつたらうと思はれる。このやうな小學校に於いて教育をうけられることになつたのであるが、博士はいはゆる秀才型もしくは模範生徒型の兒童ではなかつたといふことである。しかし、小學校の教育そのものが、次第に草創時代を過ぎて來ると共に、一般文運の進歩もそれを助け、年を追うて幾らかづつ整頓して來たであらうし、博士みづからもまた、奮勉して業を受けられるやうになつた。このやうにして五年間の博士の小學校時代は終つた。この年、博士は十四歳であつた。

小學校を卒業せられた年に、てうど千葉に中學校が開設せられたので、博士は翌十二年の三月になつて、そこに入學せられた。多分、この時の入學者によつて新に初級が編制せられたのであらう。このやうに中學校に入學せられたことについては、父君の特殊の配慮があつたといふことである。父君は博士の幼時から斷

えず江戸または東京に往復してゐられたさうであるから、兒童時代の博士もこの父君によつて齎らされた廣い世間の何等かの空氣にゑのづから觸れるところがあり、上級の學校に進まうといふ欲求も、一つは、そこからいつのまにか生じて來てゐたであらうが、父君もまた博士のために、その志を遂げることできるやうに盡力せられたのであらう。博士の家は兄君がつがれることになつてゐたのである。しかし、博士のこれから長い修業時代は、決して世間なみの安易なものではなかつた。中學校時代の或る時期には、千葉から一里ほど隔たつてゐる濱野の漁夫の家に起居して、そこから通學せられたが、時には半ば自炊の生活をせられたこともあるといふ。博士は早く兒童時代から世路の艱難を知られたので、中學校の入學も、一つは、それに刺戟せられての發奮から出たことでもあるやうに解せられるが、その世路の艱難は、これから後も、學生時代の終るまで、博士の身から離れなかつたやうである。さうして、短からぬ年月の間、その艱難に堪へ、それを克服して來られたことが、年齢と共に積み重ねられた一般の生活の體驗と、學校の教育やその他の方法によつて、次第に豊になつて來た知識とに助けられて、ゑのづから博士の人格の修養となつたのであらう。しかし、博士は、一面に於いてはほまかな氣分をもつてゐられたので、中學校でも、成績は優良であつたが、いはゆる勉強家氣質の生徒ではなかつたらしく、また席次を争ふやうな態度などは少しもなかつた、といふことである。さうしてそれは、學生時代を通じて、後までも同じやうであつた、と聞いてゐる。

博士の入學せられた時の千葉中學校は、そのころ師範學校の校長であつた那珂通世氏が、綜理（校長）を兼ねてゐたのであるが、同氏はその年に東京に轉任を命ぜられた。その翌年、三宅米吉氏が教師として來任したが、氏もまた、十四年に、同じく東京に轉任した。博士が中學生として兩氏の教をうけられたのは、何

れも短い間ではあつたが、その感化は少なくなかつたらうと推測せられる。後に上京して大學豫備門に入られてから、或る時期の間、三宅氏の家塾に起居せられたのは、この時に結ばれた同氏との因縁によるのである。學校でうけられた教育については、これもまたよくわからぬ點があるが、そのころは一般に、いはゆる英・漢・數の三科が重んぜられ、さうしてその數學も、またその他の學科も、殆どみなイギリス語の教科書によつたのであるから、千葉中學校に於いても、また同様であつたらうと思はれる。たゞこゝでは、那珂氏の意見によつて加へられた日本文典が、かなり重要視せられてゐたといふことであるが、それが、他日、博士の言語に深い關心をもたれるやうになつたことと、關係があるかどうかは、やはりわかりかねる。博士は、この中學校を、十五年の七月に、首席で卒業せられた。在學年限の短かつたのは、當時の千葉中學校の修業年限が、三ヶ年半であつたからである。この年、博士は十八歳であつた。

### 三 史學への志望

博士が東京大學の豫備門に入學せられたのは、十六年の二月であつた。當時の豫備門の學年は九月に始まり七月に終ることになつてゐたから、この時期に入學せられた事情には明かでないところがあるが、多分、第二學期に於いて初年級に編入せられたのであらう。さういふことも、このころにはあり得たやうに規程の上から考へられる。もしさうならば、中學校卒業の後、この時までどうしてゐられたかも、またわかりかねるが、上京して英語などを學んでゐられたのではあるまいか。さて、このころの豫備門の修業年限は三ヶ年であつたが、病氣のため途中で一學年元級にとゞまられたので、卒業は十九年となつた。然るに、この年、

豫備門は第一高等中學校となり、舊校の卒業生は、新校の本科（修業年限二ヶ年）の第二年に編入せられて、更に一ヶ年の修學を要することに定められたため、高等中學校を卒業して大學に進まれたのは、翌二十年であつた。東京大學は前年に帝國大學となつて、組織も改められ、文科大學には哲學、和文學（後の國文學）漢文學（後の漢學）、博言學の四學科が置かれてゐたが、この年、新に史學、英文學、獨文學の三學科が開設せられたので、博士はこの新設の史學科に入られた。これが博士の史學者として立たれるやうになつたそもその機縁である。もし豫備門時代に於ける一ヶ年の休學がなく、十八年にそこを卒業して東京大學に入られたならば、この舊制の大學には、史學專攻の科は無かつたし、また十九年に於ける豫備門の卒業生が、すぐに帝國大學に進むことになつたならば、その年には、まだ新制による大學の史學科もできてゐなかつたから、どの場合でも、博士は大學に於いて他の學科を志望せられたに違ひなく、従つて、特に史學の研究に志があつて、そのために新設の史學科に轉ぜられた、といふやうなことはない限りは、もとの志望學科を修めて大學を出られたであらう。さすれば、史學者としての博士は、或は、我が國に存在するに至らず、従つて我が國の史學の少くとも一面は、現に發展して來たのとは、かなりに違つた道すぢと姿とをもつて、今日に及んだでもあらう。もつとも、大學で修められた學科や、それと關聯した卒業後の地位やには、かゝはりが無く、史學に特殊の興味をもつて、その方の研究に力を盡されるやうにならなかつたとはいひ難いが、よしさういふことがあつたとしても、大學時代の學問的修養と世に出られてからの境遇との違ひから、その研究の方向や態度や業績や社會的のはたらきやは、現に博士の經歷して來られたところと同じではなかつたらうから、博士によつて開拓せられ指導せられて來たと同じやうな史學の状態は、やはりわが國に現出しな

かつたであらう。さう考へると、博士が二十年に高等中學校を卒業せられたこと、従つて豫備門時代に一年の休學をしなければならぬやうな病氣にかゝられたことは、我が國の史學の上に、ひろく見れば學問の上に、大なる關係のあることである。

博士が何故に史學科を志望せられたか、それが史學にどこまで興味をもつてゐられてのことであつたかは、明かでないが、中學校時代からの同窓であり、親友でもあり、豫備門時代に三宅氏の家塾で起居を共にしたこともある、木内重四郎氏と大和久（後の石井）菊次郎氏とが、みな既に法科大學に進んでゐたにかゝらず、博士のみが文科大學に入られたのは、文科方面の學問に何ほどかの親しみをもつてゐられたからのことやうである。豫備門時代に、或る哲學上の著書か論文かの翻譯をせられたといふことであるが、それも、このことについて考へあはされる。このやうな傾向のあつたところへ、史學科が新に開設せられ、教師としてリースの來任したことが、特に博士の興味をひいて、それがために、この新設の學科に入られたのでもあらうか。同じ年に開かれた英文學科にも獨文學科にも進まうとせられなかつたのは、博士の嗜好がそこに無かつたからのことと解せられよう。史學に志を向けられたことについては、或は、そのころ既に史學の研究に主力を注がれてゐた三宅氏からの影響もいくらかはあつたかも知れぬ、といふ推測もなし得られようが、たしかにさうといふこともできかねる。少くとも、博士が大學に進入せられたのは、三宅氏のヨウロッパ留學中のことであつた。が、ともかくも、博士は、このやうにして帝國大學における史學科の最初の學生となられたのである。同時に入學した學生は三名であつた。

こゝで少しくあともどりをして、明治時代になつてから、このころまでの、史學界の情勢を回顧してみる。



いはゆる漢學の一科としての史學が、儒教の政治思想・道德思想を準據として、名分を正し鑒戒を示すところに、重點が置かれてゐたことは、いふまでもないが、明治時代となつても、漢學そのものの存續に伴つて、このやうな史學の觀念もまた残つてゐた。さうしてこの意味で讀まれた史書は、主として支那のであり、漢文で書かれた我が國のものが、それに附隨してゐた。次に國學に於いても、史學に關與する一面があつたが、それは主として古典に對する特殊なる思想的解釋であり、それを助けるものとしての我が國の史書を讀むことが、それに附隨してゐたのである。何れも歴史的事實の攻究を主なる目的とするものではなかつたが、この二つが、いはゞ前代から傳へられた史學の主なるものであり、そのうちでも前者が重要な地位を占めてゐた。ところが、一方では、西周氏の場合に於けるが如く、西洋の學問の方法を理解したものが、かういふ史學、特に漢學によつて養はれた史學の觀念、に對する修正の意見を抱くやうになつて來たと共に、他方では新しい時代の一般の知識的要求が、歴史の歴史の知識を供給することは、洋學の任務であり、主としてヨーロッパ人やアメリカ人の著述の翻譯もしくは纂譯といふ形において、それが行はれ、さうしてそのはじめには、たゞ常識的な一般史の概要を示すものが、多く現はれたやうである。が、必ずしもそればかりではなく、例へばギゾーのヨウロッパ文明史、バツクルのイギリス文明史の如き特殊のものすら、五年及び七年に既にその翻譯が試みられてゐるので、かういふものが、翻譯せられるほどに、人の注意をひいたといふことは、歴史に對する新しい見かたが喜ばれたこと、従つてまた、漢學の傳へた史學思想に對する不満足または反抗が、それに伴つてゐたことを示すものであり、八年に出版せられた福澤諭吉氏の「文明論之概略」にも、それが

明かに現はれてゐる。さうしてさうなると、一步進んで、このやうな新しい見かたで我が國の歴史を考へようとするにもなつて來るので、十年に第一卷の公にせられた田口卯吉氏の日本開化小史は、そのさががけをしたものである。この書の根本思想は、歴史は事實と事實との因果關係を明かにするものであり、個人の言行を記すものではなくして、社會の動きを考へるものであり、その社會は進歩するものであつて、その進歩には一定の理法がある、といふところにあるので、儒家風の史學の觀念とは、根本的に違つてゐる。しかし、これは歴史の見かた取扱ひかたが、新しいのであつて、歴史上の事實については、在來の史書の記載を殆どそのままに承認し、それに基づいて何等かの見解を立てたものである。史料を検討批判し、或は根本史料に溯つてその事實を明かにする、といふことは、考へられなかつたのである。ところが、政府の事業としての修史局、もしくは修史館、の編年史編纂の方面では、歴史上の事件として傳へられてゐることの眞偽を明かにしなければならぬため、そのづから一種の史料批判を行ふやうになつて來る。さうして、事實を事實として記載するのが目的であるこの事業には、そのづから、儒家風の史觀を排斥する傾向が生じて來る。もつともこれにも、前代の特殊の學者の業績に、いくらかの前蹤が無いでもないと共に、何ごとについても、過去の因襲から脱却しようとする、このころの一般の氣風の影響もあり、ヨーロッパの史學に模範を求めようといふ考も、それに伴つてゐたことが、注意せられる。史學についての二つの新しい學風は、このやうにして徐々にその萌芽が現はれて來るのであるが、たゞそれは我が國の歴史についてであつて、支那の歴史にはまだ及んでゐなかつた。

目を轉じて學校に於ける歴史教育の状態を見ると、明治三年に定められた大學の規則では、教科、法科、

理科、醫科、文科の五科を以て組織せられるその文科の學科のうち紀傳學があつて、我が國と支那との上に代に關する史書がそこで用ゐられ、別に教科の學科に神教學があつて、我が國の古典がそこで讀まれることになつてゐた。これは、上に述べた漢學及び國學の史學思想と關係のあることであつて、大學そのものは幕府の昌平黌を繼承したものでありながら、國學的精神によつて國民の思想を指導しようとする方針の下に、それが置かれたためであるが、この大學は組織がまだでき上らないうちに、わづか數月にして廢止せられた。それと共に、開成所を繼承した大學南校の同じ年に定められた規則では、普通科の歴史に、いはゆる萬國史があり、専門科として、法・理の二科と共に、設けらるべき文科の學科に、各國史があることになつてゐたが、いづれも西洋の歴史である。この専門科は、當時まだ實際には設けられず、南校そのものも、その後、制度にも名稱にも種々の變改があつたが、六年に至り、名稱が開成學校となり、そのうちにいくつかの専門科が設けられた。文科は設けられなかつたから、本科に史學のあるものはなかつたが、豫科で授けられた歴史は、どの専門科に屬するものでも、みな西洋のであつた。これが、すべての現代の學問がいはゆる洋學にやらねばならなかつた、このころの我が國の最高學府の状態であつた。十年に東京大學が設けられ、その法・理の二學部は開成學校から繼承せられると共に、新に文學部が置かれたが、そこで講ぜられた歴史もまた西洋のであり、學科課程には、歐米史學と記されてゐた。文學部の第一科たる史學、哲學、政治學の何れかを專攻する部門に於いては、いふまでもなく、第二科たる和漢文學科に於いても、また同様であつた。その後、學科の廢置分合が數々行はれたが、史學のこの状態は後までも續いてゐて、我が國及び支那の歴史は大學では講ぜられなかつた。しかしこれには、已むを得ざる事情があつた。我が國の歴史については、田口卯

吉の日本開化小史の如きものが世に出はじめはしたが、全體から見ると、このやうな研究が發達してをらず、支那の歴史についてはなほさらのことであつたから、いはゆる歐米史學と並んで、大學で講ずることのできるやうな我が國及び支那の歴史らしい歴史が、まだ研究せられてゐなかつたのである。文學部の第一科に於ける専攻科目としての史學は、十二年に廢止せられたが、その理由として、志望學生が殆ど無いといふことと、我が國の大學で講ずべき史學は、歐米の歴史のみならず、本邦、支那、印度などの東洋各國の歴史をも含んだものでなくてはならぬのに、そのやうな史學の教授たるべき人を得ることができないといふことと、この二つが擧げられてゐることを考ふべきである。學生の無いのも、教授の無いのも、要するに、我が國の學界に於いて、學問的意義に於いて史學といひ得られるものが殆ど成り立つてゐず、従つて我が國や支那の歴史についての學問的研究がまだ殆ど着手せられてゐなかつたことを示すものである。いはゆる歐米史學としても、たゞ西洋人の考へたことを、その著述によつて理解するだけのことであつた。けれども、歐米史學についてのそれだけのことが、實は我が國の史學をうちたてるために、順序として一應はとほつて來なければならぬことであつた。歐米史學は歐米の歴史を知ることであるが、その歴史の見かたには、我が國や支那の歴史の研究にも應用せらるべきところのあるものだからである。さう考へると、和漢文學科で、哲學（西洋哲學）と共に、歐米史學の講ぜられたのも、意味のあることであつた。なほこれに關聯して考へねばならぬのは、我が國の古典を教授するために十五年に設けられた古典講習科の學科に、正史、雜史及び支那歴史のあることであるが、これは何れも、それ／＼の古典を、舊來の方法で、講習することであり、翌十六年に開かれた支那古典講習科に史學のあるのも、それが經學、諸子、詩文と並べて記してあり、經史子集の四科が

具はつてゐることから見ると、やはり、漢學風の學問のしかたで、支那の史籍を讀むことであつたに違ひない。古典科の設けられた主旨は、舊來の和學及び漢學の保存にあつたので、我が國及び支那の文物を、新しい學問的方法によつて、新しく研究しようとするのではなかつたから、歴史に關する學科としても、また同様であつたと推測せられる。それは、上に記した學科の名目からも、知られることである。後になつて學問的史學の發達に種々の寄與をした古典科出身の學者のあることは、固よりであるが、それはその學者の個人的なはたらきであつて、古典科の本來の性質は、上に述べたやうなものであつた。従つてそれは、概していふといはゆる歐米史學によつて興へられた歴史の取扱ひかたに關する新しい知識とは、交渉の無いもの、或は少いものであつた。さうしてこれもまた、學問的史學が、當時の我が國に、まだ成り立つてゐなかつたこと、よきしるしである。

以上見て來たことは、大學の學科としての史學の状態であるが、普通教育に於ける歴史科も、また同じ情勢の下に置かれてゐた。中學校に於ける歴史は、いはゆる萬國史、即ち西洋の歴史であつて、教科書としてはイギリス語のものが用ゐられてゐたし、大學の豫備門に於いても、やはり同様であつた。たゞ中學校では、漢文として日本外史、皇朝史略、の類が授けられ、豫備門でも、國史學要、日本政記、十八史略、通鑑學要、の如きものが講ぜられてゐたので、我が國及び支那の歴史に關する或る程度の知識が、それによつて興へられた。これは、我が國及び支那の歴史を、まともつた歴史として、即ちいはゆる萬國史と同じやうな形をもつて、授けることのできる教科書が無かつたからであるが、それができてゐなかつたのは、上に述べた如く、學問としての史學がまだ我が國に發達してゐなかつたからである。また授業の實際からいふと、萬國史とて

もイギリス語の教科書を用ゐたのであるから、それがまともな歴史の形を具へたものであつたにしても、半ばは語學のためにせられたのであり、その點では、漢文として上に擧げたやうな史書が用ゐられてゐたのと、大なるちがひはなかつた、ともいひ得られる。萬國史の教師としても、その大多數は史學の知識をもつてゐるものではなかつた。或はまた、當時なほ一般には、日本外史や十八史略のやうなものをよむことが、我が國や支那の歴史の學問であるやうに考へられてゐた、といつてもよいほどであつたから、それを讀むことになつてゐる以上、我が國の歴史も支那のもの、學校で授けられてゐた、といふべきであらう。だから、このころの學校教育に於いて西洋の歴史をのみ重んじ、我が國及び支那の歴史を輕んじてゐたやうに思ふのは、必ずしもあたつてはゐなからう。何よりも重要なことは、我が國に史學がまだ形づくられてゐなかつた、といふ事實である。たゞ豫備門では、十五年になつて、從來漢文として授けられてゐた國史鑿要を歴史として授けることにし、十七年に改定せられた學科課程に於いて、始めて、史學に日本歴史、支那歴史、萬國史の名が現はれ、第一高等中學校の豫科の學科として、それが繼承せられたことは、注意せらるべきである。ただ日本歴史や支那歴史が、實際どのやうにして授けられたかといふと、それは明かではないが、十五年に田口卯吉の日本開化小史が完成し、十六年から二十一年にかけて、同じ人の支那開化小史が出版せられたこと、また十九年には、上古史の解明に考古學上の知識の利用せられてゐる三宅氏の日本史學提要第一卷が公にせられたことが、これについて參考せられようか。日本歴史と支那歴史とは、このやうにして學校の學科の上に現はれて來たが、しかし高等中學校の本科では、西洋の歴史のみが講ぜられることになつてゐた。白鳥博士が中學校や豫備門や高等中學校でうけられた歴史教育のいかなるものであつたかは、以上述べて來たところ

によつて、ほゞ知ることができらる。

#### 四 大學在學時代

史學界が上記のやうな形勢であつた時に、文科大學の史學科が開設せられ、歴史については上記の如き教育をうけられた博士が、その最初の學生となられたのである。大學の制度としては、東京大學時代に一たび置かれて間もなく廢止せられた、文學部第一科に於ける専攻科目としての、史學の復活とも考へられるが、史學の専門の教師を新にドイツから招聘し、學問としての史學を我が國に起さうとしたところに、新しい意圖があつた。特にリースはランケの學風をうけついでゐる點に於いて、これまでのいはゆる歐米史學とは趣を異にしたものが、彼によつて、我が國に傳へられたことは、注意を要する。ランケの思想なり研究の方法なりが、どこまでリースによつて紹介せられたかについては、はつきりしない點もあるが、歴史の研究は歴史的現象を客觀的存在として取扱ひ、ありのままの事實をありのままに見るべきものであつて、自己もしくは自己の時代の主觀的情懷や特殊の思想を、それに投影してはならぬこと、時代を動かした人物も歴史上の事件も、もとより重要であるが、それと共に、人物や事件の背景としての、その時代の一般の政治狀態と、それによつて醸し出された全體の雰圍氣とに、注意しなければならぬこと、歴史は根本史料によつて研究せられねばならず、従つて、史料についても歴史としての成書についても、それに對する批判が必要であることなど、ランケの著書によつておのづから知られる彼の史學に對する見解は、何等かの道すぢによつて學生にも知られて來たであらうと思はれる。リースが、國史科の設置について、大學に提出した意見書にも、根

本史料の蒐集と研究との重要であること、史料批判の學問的方法が學ばねばならぬことが、述べてある。ランケの史觀に於いて重要な一面をなす宗教的傾向が、リースによつてどう取扱はれたかは知らぬが、一國一時代の歴史も世界史的觀點から見られ、世界の動きに交渉のあるものとして考へられたこと、世界史の觀念が彼によつて明かにせられたことは、リースの講じた西洋の歴史そのものによつても、あのづから學生に傳へられたであらう。しかし、我が國の史學の成立について最も重要なことは、上に述べた研究の方法、特に史料批判の學問的方法が、何ほどの程度で新に知られて來たことであつて、これは、これまでのいはゆる歐米史學を講じたものの、深く注意しなかつた點である。これまでは、西洋の學者の著作によつて西洋の歴史を知らうとしたのであるから、研究の方法よりは、その結果として書物に現はれてゐることが、もしくは歴史の見かた取扱ひかたの新しいことに、心がひかれたのである。ランケの著書に於いても、そのイギリス史がイギリス語譯によつて、既に我が國に知られてはゐたが、よしそれを讀んだものがあつても、いかなる史料がいかに用ゐられてゐるかは、あまり考へられなかつたであらう。ところが、もしこのやうな史料の取扱ひかたに關する方法論が、或る程度に、知識として傳へられたとすれば、西洋の學者の歴史の研究にこのやうな方法のあることが、始めて知られたのみならず、我が國に於いて、我が國の史料により、新に我が國の歴史を研究しようとするについては、これが重大の意義をもつて來る。文科大學に於ける國史料の設立が、リースの意見によるところのあつたことは、無意味でない。

史學科の教科の中心はリースの講義であり、從つて、具體的に講ぜられた歴史は西洋のみであつた。日本歴史と支那歴史との講義は、前年から設けられてゐた和文學科及び漢文學科にはあつたが、新設の史學科



には無かつた。ところが、二十一年、博士が二年生であつた時に、始めて日本歴史の講義が史學科に加へられ、重野安禪氏が、講師として、それを擔當した。これは和文學科、漢文學科の日本歴史とは違つたものであり、修史局が、編年史編纂掛の名によつて、大學に移管せられたことに伴ふ新施設であつたが、翌二十二年に、史學科とは別に、文科大學の一科として、國史學科が設けられ、編年史編纂掛と特殊なる關係をもつことになつた。さうしてその教科には、日本歴史の外に、史學と支那歴史とがあつた。支那歴史が史學を專攻する學科の教科として始めてとりあげられたこと、またそれが、史學科ではなくして、國史學科に於いてであつたことは、注意を要する。我が國の歴史と支那歴史とは、特殊の關聯をもつものと考へられたのであらう。國史學科が史學科の外に置かれたのは、當時の特殊の事情によつたことであらうが、同じ年に創設せられ、博士もまた委員の一人として、その成立に盡力せられた史學會は、この二學科を結合するはたらきをしたものである。また史學そのものについていふと、ヨウロッパに發達した近代の史學、特に史料批判の學問的方法の一面、及び歴史的事實を客觀的存在としてありのまゝに見るといふ態度と、修史局に萌芽を發した我が國の史書に對する批判的態度、及び儒教風の名分主義・道德主義から脱却しようとする傾向とは、あつたから相觸れるところがあつたので、それによつて、我が國史の學の漸く學問的研究の域に進んでゆく一つの途が開かれかけたのである。この國史學科に於いて行はれた史書批判は、一種の啓蒙主義的・合理主義的性質を帯びたものであるので、それに對しては、後になつて重大なる修正が行はれねばならなかつたが、ともかくも、それによつて新しい研究の方向があつたから定められたのである。しかし、それは國史の方面に於いてのことであつて、支那史の分野にはまだ及んでゐなかつた。大學の講義には關係の無いものであり、

また半ば教科書として述作せられたものである概説的の支那史として、那珂通世氏の支那通史、市村瓊次郎氏の支那史の第一巻が公にせられたのは二十一年であつて、支那歴史が、いはゆる歐米史學の影響をうけた、或はむしろ教科書としての萬國史の形を學んだ、新しい姿を以て世に現はれるやうになつて來たが、さうしてこれらの書は、當時の著作として大なる意義と價值とをもつてゐるものではあつたが、學問としては、まだ根本的に史料の批判を行ひ、その基礎の上に立つて支那史を研究するまでには、なつてゐなかつた。支那の外のアジア諸國の歴史に至つては、我が國及び支那の歴史に現はれてゐることの外には、學界ではまだ殆ど問題にせられてゐなかつた。たゞ現代の朝鮮については、政治的關心があり、また思想としては、西洋に對する意義での東洋といふ名が、我が國と親しい聯結のあるものとしての支那と印度とを含む稱呼として用ゐられ、大學の教科としても、西洋哲學とそれに對する東洋哲學との名が、十五年から既に現はれてゐたことが、注意を要するので、一方に於いては、西洋の學術を更に深く學ばうとする欲求が、ますます強められて來たと共に、他方に於いては、いはゆる東洋についての新しい關心が、漠然ながら、次第に生じて來たことが、このことによつても知られる。古典講習科の卒業生を中心とした東洋學會といふものが、十九年に組織せられたこと、いはゆる日本畫の學習を目的とする東京美術學校が二十年に設立せられ、雜誌「國華」が二十二年に發刊せられたことなども、またこの風潮を示すものであらう。さうして、それはこのづから史學の上にも何ほどかはたらきをするやうになつてゆくのである。

## 五 東洋史研究のかどいで

博士は史學界がかゝる状態であつた二十三年に史學科を卒業せられた。二十六歳の時である。それからすぐに學習院教授に任ぜられて、歴史地理課の課長とられた。學習院では、この年に學則の改正があり、歴史については、中等科で日本歴史、支那歴史、歐洲歴史を、高等科で日本、歐洲、米國、東洋諸國の歴史を授けることになつてゐたので、博士は初は日本歴史及び歐洲歴史を擔任せられたのであるが、次いで東洋諸國歴史の一部分として、支那の周圍の諸民族の歴史をも受持たれることになつた。このころになると、日本歴史及び支那歴史は、一般に中學校及び高等學校の教科となつてゐて、中等學校で用ゐられるやうなそれだけの教科書もできるやうになつたが、支那の外の東洋諸國の歴史を授けることにしたのは、學習院の創意であつたし、既に述べた如く、さういふ方面の歴史については、當時の我が國では、學問的研究が全くできてゐなかつたのであるから、學生に對してそれを講ずるに當つては、まづ教師みづから、新に、それを研究してかゝらねばならなかつた。博士は、大學の學生としては主として西洋史を學ばれたのであるが、このやうな事情から、はじめて東洋諸民族の歴史の研究に手を染められることになつたのである。ところが、博士にゐては、研究の進むにつれて、それが次第に深められも廣められもしていつたので、單なる講義の準備としてのしごとにはとゞまらなくなり、次ぎ／＼に起つて來る種々の問題を、根本的に解釋しようとしてせられるやうになつた。かくしてゐのづから東洋諸民族の歴史の學問的研究が、博士の専門となつて來たのである。博士が東洋史家となられたのは、このやうな、いはゞ偶然の、事情が契機となつたのであつて、博士みづからの志向が初からそこにあつたのではなかつた。けれども、一たびこの方面の研究を始められると、着々としてその業績が擧り、終に東洋史家として大成せられるに至つたのは、史學科に學んでヨウロッパの學者の

著書に親しみ、その研究の精神と方法とに觸れてゐられたことが、その素地となつたことは、明かである。さうして、それと共に、師承もなく先蹤もない研究に精進せられたところから、その研究の獨自性もしくは獨創性が生じて來たことも、また<sup>その</sup>のづから解し得られる。

博士のこの研究は朝鮮史から始められたので、その結果は明治二十七年から三十年ころにかけて次ぎ／＼に發表せられた「檀君考」、「朝鮮古傳説考」、「朝鮮古代諸國名稱考」、「朝鮮古代地名考」、「朝鮮古代王號考」、「朝鮮古代官名考」、「高句麗の名稱につきての考」、「吏道」、「日本書紀に見えたる韓語の解釋」、などに於いて見られるのである。このころになると、朝鮮史に關する種々の研究が、世に現はれて來たので、史學雜誌にだけでも、菅政友氏、吉田東伍氏、林泰輔氏、坪井九馬三氏、那珂通世氏などの論文が、二十四年から二十九年までの間に、載せられてゐて、そのうちでも、菅氏の「高麗好太王碑銘考」、那珂氏の「高句麗古碑考」、「朝鮮古史考」などの着實なる考證的研究は、特に注意すべきものであつた。また書物としては、我が國と半島と大陸とに於ける政治的、もしくは民族的、勢力の消長興廢を、雄大な規模を以て、相關的に考察した「日韓古史斷」が、二十七年に出版せられてゐる。しかし、博士の研究はこの間に立つて、特異の分野を開拓せられたものであつて、上記の諸論文の題目を見ても、その主題としてとり上げられてゐるものに、傳説、もしくは傳説か史實かの明かにせられねばならぬ史籍の記載、の批判と、言語の研究との、あることが何よりも目につく。これは當時の史家の何人もが、まだ試みなかつたところである。傳説は取扱はれたが、その取扱ひかたが學問的でなく、上代史は考へられても、史料の批判の十分に行はれてゐない憾みがあつたのである。言語の研究に至つては、殆ど學者の注意をひかなかつた。ところが、古傳説の批判は、そのこと

みづからが思想的意義をもつものであるから、その方法としても、思想的觀察が用ゐられねばならず、言語からの考察もそれには必要であること、また言語の研究は、そのづから民族の研究に歸着し、従つてまたその方法ともなるものであること、さうしてこれらもまた、當時に於いては、博士の他には殆ど顧みることがなかつたところであることを思ふと、博士の研究は、その主題も、その方法も、博士みづからの研究が進められて來た間に、そのづから見出されたものであり、博士の腦裡に於いて、獨自に形づくられて來たものであることが、知られると共に、博士のこれから後の研究の方向が、やはりこの間に次第に定められるやうになつて來たことが、今日からは、考へ得られるのである。博士は上記の朝鮮に關する諸研究と共に、既に「弱水考」を書かれてゐるが、三十年から後の三四年間に發表せられた「匈奴は如何なる種族に屬するか」といひ、「突厥闕特勤碑銘考」といひ、「契丹女眞西夏文字考」といひ、「支那の北部によつた古民族の種類について」といひ、また「烏孫についての考」といひ、「泰西の學者が印度日耳曼であると稱する北狄西戎の種類につきて」といひ、「戎狄が漢民族の上に及ぼしたる影響」といひ、またドイツ語で書かれた「匈奴及び東胡民族の言語について」(Über die Sprache des Hing-nu Stämmes und der Tung-ju Stämme)と云ふ、何れも朝鮮の傳説及び言語・民族に對する研究の異なる地域と民族とにひろげられたものであり、その發展として目せらるべきものであつて、博士の滿洲・蒙古及び西域方面に對する後年の偉大なる業績は、この端を發したのである。朝鮮の研究も、この間に繼續せられたので、「日本の古語と朝鮮語との比較」「漢史に見えたる朝鮮語」などの長篇が發表せられてゐる。

博士の研究の領域がこのやうに次第にひろげられて來たのは、東洋諸民族の歴史の研究といふ最初の動機

に、その由來はあらうが、それと共に、北方諸民族の間には、民族的にも政治的にもまた文化的にも、相互に深い交渉があり、一民族の歴史は、その周囲の民族の歴史との關聯に於いて、始めて理解せられるものであることが、研究の進むにつれて痛切に感知せられて來たからでもあらうと、推測せられる。後になつて、支那民族、支那本土の文化や思想に關する研究をせられるやうになつたのも、一つは同じ事情からであらう。支那民族の政治または文化の特性についての種々の問題に對する博士の解釋が、周囲の民族との關係に重點を置いて考察せられてゐる場合の多いことによつても、それが知られる。しかし、博士の研究は多くは、一民族の人種的性質、その住地もしくはその移動、その一々の傳説もしくは歴史上の何等かの事態、その文化の或る様相、といふやうな特殊の主題による論文として發表せられ、一般的な歴史を構成し叙述することには及ばれなかつた。博士は大學を出られた後にも、常にランケの著書を精讀せられ、嚴密なる史料批判と精細なる考證とによつて、個々の事實の真相を明かにすると共に、鋭き史眼によつて、よく大勢の推移を透見し、民族史・時代史の世界史的關聯を把握し、また巧なる叙述によつて、歴史上の人物を紙上に活躍させてゐる點に於いて、史家としての彼を推賞してゐられたので、それは後までも變らない博士の意見であつたが、博士みづからはランケの如きまゝとまつた著作をせられなかつたのである。これは、この方面の諸民族に關する研究が、博士の新しく開拓せられたところであるために、一般的な歴史叙述の基礎となり材料となるべき一々の問題の解釋が、まづ要求せられたからでもあるが、それと共に、嚴密なる意義に於いての歴史的發展が、この方面には行はれてゐず、従つて一般的歴史の叙述が、もとゞできないところであるからでもあつたらうと思はれる。けれども、一つの主題を取扱はれる場合にも、民族間の相互の交渉が、常に注意ぶかく

考慮せられてゐるので、さういふ交渉そのものが研究の主題となつてゐることも少なくない。筆者は明治三十年前後の時期に於いて、遠くは西域より蒙古・滿洲を経て半島に至り、更に我が國をも含めての、北方アジア諸民族間の相互の交渉と關聯とについての博士の意見を、しばしば聞いた記憶を有する。博士が北方諸民族の一つについての研究を主題とせられたのは、北方諸民族及びその活動の特殊性のゆゑである。ところで、博士のこの民族研究には、言語が重要なはたらきをしてゐるのであるが、博士はこのころ朝鮮語はいふまでもなく、滿洲語、蒙古語、突厥語などの知識を得ることにつとめられた。さうしてそれには、ヨーロッパ人の研究の結果によるところが多かつたのである。

博士は、朝鮮史の研究を當面のしごととしてゐられた時から、既にヨーロッパの東洋學者の諸研究に注意せられてゐたので、研究の領域が滿洲以西にひろげられたことにも、一つはそれに刺戟せられたところがあつたらうと思はれる。「Klaproth の Tableaux historiques de l'Asie」を讀んだのが、自分の東洋學研究のはじめりであつた」とは、後年博士がみづからいはれたことである。ところが、研究の領域がこのやうにひろげられて來ると、この方面のことについては、ヨーロッパの東洋學者の研究が數多く世に現はれてゐるので、まず／＼それを知る必要が感ぜられるやうになつた。そこで、博士は自己の研究に伴つて、これに關する著書や雜誌を、手にし得られる限り、蒐集し涉獵せられた。學習院の圖書館にこの種の書籍や雜誌の多く藏せられてゐるのは、博士の蒐集によるのであるが、博士みづからも裕かならぬ財囊をしぼつて、多く必要の圖書を購求せられたので、Yule の *Cathay and the way thither* に月俸の全部を抛つて同僚の驚きを買はれたといふ逸話さへもある。二十八九年ころに、外國語學校の夜學科に通學して、ロシア語を學ばれたのも、

また主としてロシア人の東洋研究に關する業績を知らうとせられたためであつた。我が國の學界に於いて、ヨウロッパの東洋學者の研究が紹介せられ、または學者によつて參考せられたことは、二十年代からのことであつて、三宅米吉氏は二十一年にヨウロッパから歸朝せられた時、既に數十種のそれに關する著書を將來せられ、雜誌「文」の誌上でその或るものを紹介せられたこともある。これらの書は、同氏及び那珂通世氏によつて利用せられたのであるが、同氏が讀まれたのは主として日本の文物の淵源を探るための、また那珂氏は支那と西方との交渉を考へるための、參考としてであつたといふ。支那の文物に、従つてまた支那をとほして日本の文物に、西方に由來するもののあることは、このころに於いて學者の注意をひいたところであつて、三宅氏の四天王紋錦旗に關する考説、伊東忠太氏の法隆寺建築論などが二十五年及び二十六年に世に出てゐる。さうしてかういふことが考へられたのは、支那と西方との交通とその間の文物の接觸とに關するヨウロッパの學者の研究が、或る程度に知られてゐたからである。博士の研究には、我が國の學界のかういふ氣運とも、幾らかの交渉はあつたであらう。しかし、博士に於いては、第一に、北方及び西域の民族そのものが、研究の對象であつたこと、第二に、單にヨウロッパの東洋學者の研究の結果に依頼して何ごとかを考へようとせられたのではなかつたこと、この二點に博士独自の境地があつた。第一についていふと、かゝる研究は、これまでの我が國の學者が全く企てなかつたことであるし、また第二についていふと、博士ともヨウロッパの學者の研究に刺戟せられまたは導かれたところがあることは、いふまでもなく、また彼等によつて提供せられた新史料を利用せられましたが、研究そのことは、支那の文獻や西方の記録やを、直接に検討することから出發せられたのであつて、そこからヨウロッパの學者の研究のまだ及ばなかつたところを



研究し、または彼等の見解を補足し訂正してゆかれる態度も、あつたから生じて來たのである。上記の鳥孫に關する研究の如きは、彼等の間に普通に行はれてゐたこの民族をアーリヤ種とする説の誤を指摘し、それをトルコ種とする説を支持せられたものである。三十二年（一八九九年）にローマで開かれた國際東洋學會に、參會の坪井氏に託して、上に記した「匈奴及び東胡民族の言語について」と「突厥關特勤碑銘考」のドイツ語譯（Die chinesische Inschrift auf Gedenkstein des K'ue-te-kin am Orkhon）とを提出せられたのも、一つは、ヨウロッパの學者の批判を求める意味であつたと共に、一つは、我が國の學者の業績を世界の學界に示すためであつた。これが博士の名のヨウロッパに知られた始であると共に、我が國の學者の東洋研究に關する業績のヨウロッパで公表せられた始でもあつた。翌三十三年（一九〇〇年）に、Bulletin de l'Académie des Sciences de St. Petersburg の第十七卷第二號に博士の論文が Sinologische Beiträge zur Geschichte der Türk Völker II として載せられたのも、これが縁となつたのである。我が國の學界もまた、これによつて博士の功績の大なるを認めたので、同じ年に博士會の推薦によつて文學博士の學位を授けられた。博士はこのやうにして我が國の史學界に重要な地位を占められ、東洋史の専攻者として世に知られるやうになられたが、これは、とうど東洋史といふ名稱が人々の耳に熟して來た時であつた。我が國の學界及び教育界の長い間の慣例として、いはゆる歐米の歴史が萬國史または世界史の名によつて呼ばれてゐたので、それは、その歐米が世界の全體であるといふ考の下に、歐米人によつて呼ばれてゐる名を、そのまゝうけつただものであるが、これは實は西洋の歴史であつて、その西洋の歴史に對する東洋の歴史がなければならず、萬國史もしくは世界史はこの二つによつて成立すべきものであるといふことは、かなり前から、西洋の文明

に對する東洋の文明、我が國と支那とを包括する一つの東洋、の存在を主張する思想界の一方面で、唱へられて來たことであつた。これは學問上の見解から來たといふよりも、むしろ經世の意味をもつてゐる一種の時務策から出たものであつて、二十四年に雜誌「日本人」の代りに「亞細亞」が發刊せられたのも、その主張の一つの現はれであつた。この「亞細亞」の主なる記者であつた三宅雄二郎氏の考案にもとづいて、中原貞七氏が編纂し、二十五年に出版せられた中等教科書としての「萬國歴史」は、上記の方針によつて書かれてゐるので、全篇を二部に分けて、第一部を東方、第二部を西方とし、東方は蒙古人種の歴史を、西方はアリア人種の歴史を、叙するといふのが、その主旨である。東洋史・西洋史といふ稱呼は、まだこの書には見えず、東西の區分のしかたも、後に東洋史・西洋史といはれるやうになつたものとは、必ずしも同じではないが、ともかくも、かういふものが世に現はれた。ところが、これが後には、學者もしくは教育家によつて、いくらかの修正をうけながら、とりあげられるやうになつたので、二十七年には、そのころ高等師範學校教授の任にあつた那珂氏が、中等學校教科課程の調査委員會で、外國歴史を東洋史・西洋史の二つに區別すべきことを提議し、同じ年に改定せられた高等師範學校の校則には、この名稱が用ゐられてゐる。さうして二十八年には、中等教育の教科書として、支那歴史に代つて、東洋歴史の名をもつものが世に現はれてゐる。調査委員會の文部省に提出した報告には、「東洋歴史は支那を中心として東洋諸國の治亂興廢の大勢を説くもの」といつてあるのによつてもわかるやうに、東洋の中心は支那であるやうに考へられてゐたからであつて、そこに、西洋文明に對して、支那を本位とする東洋文明の存在を主張する思想が潜んでゐる。たゞし、このいはゆる東洋史には、我が國の歴史は含まれてゐないので、そこに、東洋史といふ場合の「東洋」と、

西洋に對する一般的概念としての、または西洋文明に對する東洋文明といふ場合の、「東洋」との、差異があるが、これは、我が國の歴史が、事實、獨自に成立つてゐるからのことであらう。が、それはともかくも、東洋史の概念はこゝに記したやうに規定せられてゐた。東洋歴史の教科書の編纂者が、その初期に於いては、大學に於ける史學の専攻者ではなくして、概ね漢學科出身者であつたことも、またこの意味に於いて注意せられる。史學科に於いても、支那歴史の一科が加へられはしたが、それは二十六年からのことであり、一般には史學科の出身者は、東洋のことには親しみが薄かつたのである。勿論、かういふ東洋史の教科書も、その敘述のしかたなどに於いては、西洋人のいはゆる萬國史もしくは世界史の教科書を學んだところがあり、ヨーロッパの學者によつて與へられた知識が取入れられてゐるが、それはこれまでの支那歴史に於いても、ほゞ同様であつた。だから、この點から見ると、東洋歴史は支那歴史の名が變つたのみのことであるといつても、大過が無いほどであつた。西洋に對して東洋といふ名を用ゐることに意味があるとせられたのである。さうしてそれには、二十七八年戰役がいはゆる東洋の天地に新しい形勢を現出させた時勢の影響もあつたであらう。だからこれは、學習院に於いて東洋諸國の歴史を教授することになつたのとは、やゝ意味が違ひ、博士の研究と交渉の無いことのやうである。しかし、同じ報告にはまた「これまで支那歴史は歴代の興亡のみを主として人種の盛衰消長を説かざれども、東洋歴史にては、東洋諸國の興亡のみならず、支那種、突厥種、女真種、蒙古種等の盛衰消長に説き及ぼすべし」といふことが、記載せられてゐるのを見ると、そこに一寸のつながりはあるので、これは、一面では、博士の研究が博士に獨自のものであつたことの徵證であると共に、他面では、一般學界にも、博士の研究をうけ入れるだけの素地が漸くできかけて來てゐたこと

を、示すものである。たゞ博士の研究は、このころの思想界の一方面にあつたやうな、何等かの特殊の主張によつて、東洋もしくは亞細亞の文明に或る權威を興へようとする思想的態度とは、關係が無かつた。博士のしごととは、どこまでも歴史上の事實の學問的研究であつたのである。

明治二十年代の終ころから三十年代の初にかけての、六七年間（ほゞ一八九〇年代の後半期）に於ける博士の學問上のしごととは、上記のやうなものであつた。これが大學の門を出られて間もない時から十年の後までのことであり、而もそれが博士みづから新に開拓せられた學問の分野に於いてのことであるのを思ふと、さうしてそれと共に、一方では學習院教授の任務をもつてゐられたことを考へると、この間の博士の勉勵と努力とが、如何に大なるものであつたかは、言のづから知り得られる。博士は學習院の教官室に於いても、寸暇があれば言語の修習をつとめられたといふことである。博士は常に、零碎な時間を利用して學び得るものは言語である、といつてゐられた。博士みづからの書齋に於ける研學の状態は、この一事によつても想見せられよう。博士は二十七年に結婚せられたので、家事は全く夫人に一任せられ、日夜研究に没頭せられたのである。たゞ、このころには、前後數年にわたつて、學習院の學生の父兄に懇請せられ、その子弟の幾人かを同居させて、指導監督の任に當られたので、その訓育には意を用ゐられた。これは學習院教授の任務の一種の延長であつたので、それがために博士の研究が妨げられることはなかつた。

このやうにして博士はその研究に勉勵せられたのであるが、それと共に、廣く諸方面にわたつて學問的修養をつむことにも、力を用ゐられた。二三の同志と共に雲照律師について佛典の講義を聽かれたのも、この間のことであつたし、印度の文化に關するヨウロッパの學者の著書をも、多くこの時代に繕讀せられた。我

が國及び支那の古典を精讀せられたことは、いふまでもない。また民族研究の必要上、民族學、神話學、民俗學などに關するヨウロッパの學者の著書をも、また涉獵せられてゐたやうである。當時は我が國に於いて、まだ文化史といふ觀念が明かになつてゐなかつたし、ランケの學風を傳へたといはれるリースによつて指導せられた博士在學時代の大學の史學科に於いては、さういふ方面の考へかたは養はれなかつたのであるが、博士は、一つは學生時代に哲學に興味をもつてゐられた思想的傾向の持續せられたゆゑでもあらうし、一つは研究そのことが、このづから文化の問題を取扱はねばならぬやうになつたからでもあらう、一般に民族生活の文化的もしくは思想的側面に深く注意せられたので、こゝに述べたことも、その一つの現はれてゐることを、語の研究とても、それが思想の表現であり、一民族の言語にはその民族の特殊の心理が現はれてゐることを、次第に悟られるやうになつた。博士は或る書肆の懇囑をうけて、西洋歴史の教科書を編纂せられ、三十年にそれが出版せられたが、從來のこの種のものには、文化に關する事項は、各時代の記述もしくは各篇章の終に、本文に對する附録のやうな形で、一括して記されることが多かつたが、博士のこの教科書に於いては、すべてそれを本文の叙述に織り込んである。これは、文化上の事業なり様相なりが、歴史上の重要な事態であると共に、大勢の推移とそれとが互にからみあひ、互に因果の關係をもつてゐることを、認識せられたからのことである。要するに、博士の注意は多方面にわたつてゐたと共に、その觀察は民族生活の内面に徹せんことをつとめられた。この時代の研究の主題が、北方亞細亞の、いはゞ未開の民族であつたにかゝらば、その研究には、このやうな用意があつたのである。博士のこれから後の研究が、多方面にひろげられていつたのみならず、一つの主題についても、多方面の資料により多方面からの觀察によつて、その研究が成

り立つやうになつていつたことは、偶然ではなし。

## 六 ヨウロッパ留學

博士の名がヨウロッパの學者に知られ、我が國の學界に於ける博士の地位が定まつた後ではあるが、博士は學習院からヨウロッパに留學を命ぜられた。三十四年（一九〇一年）の春のことである。博士は、海路かの地に赴いてフランスに上陸せられたが、直にドイツにゆかれた。さうして、ベルリンで、或は大學の講席に列し、或はトルコ語の研究をつとめられた。それからハンガリに移り、ブタペストにとどまつて、その國語を學びその歴史をたづねられた。ウラル・アルタイ語系に屬する諸民族の言語と歴史との博士の研究は、これによつて大に進んだ。博士がハンガリにゆかれたのは、その國がヨウロッパの一地方にあり、その文物がヨウロッパ化せられたにかゝはず、その民族がウラル・アルタイ語系であつて、その言語と固有の民族性とを保持してゐるからであつたが、當時は我が國に於いてこの民族に注意するものが殆ど無かつたのに、博士が特にこの國にゆかれ、さうして熱心にその國語を學び國情を知らうとせられたので、この國の識者は深くこれを喜び、同じ東洋民族の學者として博士を歡待した。博士もまた、その學者と親しく交はり、或はハンガリ語で學會に講演を行ひ、或は論文のドイツ語譯を雜誌 *Kollet Semle* に寄せられた。（この論文は「鳥孫のついで考」*Über den Wu-sun stamm in Centralasien* と「朝鮮古代王號考」*Über die altko-reanischen Königstitel* とである。）ハンガリの識者が、今日に至るまで博士に對して敬愛の情を抱き、我が國に來遊したものが、必ず博士を訪問する例になつてゐたのを見ても、この國に於ける當時の博士の活動が

想見せられる。なほ博士は、三十五年（一九〇二年）にハンブルヒで開かれた國際東洋學會に我が國を代表して出席せられ、上記の論文を朗讀せられると共に、親しく各國の東洋學者と交を結ばれた。その後、フランスに轉じて、ヨウロッパに於ける東洋研究の中心ともいふべきパリにしばらく足をとどめ、その地の學界の情勢を視察せられた。東洋學に關する多くの著書や論文を蒐集購求されたのも、また主としてパリでのことであつた。これで豫定せられたしごととの大部分が終つたので、それからドイツを経てフィンランドに入り、北ヨウロッパに於ける特殊の存在であるこのウラル・アルタイ語系の民族を訪ね、更にロシアに遊んで、東洋學の研究に於いて一種の特色を有するこの國の學界を視察せられた。かくして留學の任務を果し、シベリヤ鐵道によつて歸朝の途に上られた。この道をとられたのは、ロシアからウラルを越えて北部アジヤを横斷し、古來北方諸民族の活動の舞臺であつたこの方面の地勢を瞥見しようと思はれたからのことであつた、と聞いてゐる。歸朝せられたのは、三十六年（一九〇三年）の冬のことであつて、前々年に東京を出發せられたから、二年半を過ぎてゐた。

博士のこのヨウロッパ留學は、歸朝後の博士のしごとに大なる影響を與へた。それは、彼の地の東洋學者の研究とその業績とを知るにつけて、博士みづからの研究が、一層高められ一層深められてゆくやうになつたことばかりでなく、ヨウロッパでは研究の機關が整備してゐて、その間から學問の空氣が醸し出され、それによつて學者も養成せられる、といふこと、學問の研究には多數の學者の協力による一面があるといふことが、彼の地の學界の状態を視察するに従つて明かにせられ、我が國で學ばねばならぬ點がそこにもある、といふことを、痛切に感ぜられたことである。我が國の位置が東洋にあり、昔からアジヤの諸民族と密接の

交渉があつたにかゝらず、その東洋の研究が甚だ幼稚であつて、却つてヨウロッパに於いてそれが發達してゐる、といふ現實の事態が、日本人としての博士の心を強くうつたので、いかにして我が國の東洋學を振興させ、我が國に秀れた東洋學者を輩出させ、さうしてそれによつて、ヨウロッパの學問の水準にまで、我が國の東洋學を高めることができるか、といふことが、ヨウロッパ滞在中の博士の心裡に斷えず往來した問題であつた。我が國の文化、特に學問が、すべての方面に於いてヨウロッパに及ばなかつた當時にあつては、それを彼の地の水準に高めることが、何ごとについてもさし當つての目標となつてゐたのであるが、東洋學者としての博士に於いては、それ以上に上記の如き特殊の意味もあつたのである。そこで博士は、このことについての幾多の計畫を胸に藏しつゝ歸朝せられた。この年、齡三十九歳。みづから意識してゐられたかどうかは知らぬが、意氣旺盛にして、我が國の東洋史學振興の重任を双肩に擔ふ概があつたやうである。明るい希望を國運の將來にかけて、みづからもその發展の一つの力とならうとするいきごみと、ならねばならぬとする責任感とをもつて、事に當つた人士が、明治時代には多く、ヨウロッパやアメリカを旅行し視察して、親しく世界の空氣に觸れたものには、特にそれが強かつたのであるが、當年の博士に於いても、またそれが見られたのである。これから後の博士は、一面では、自己の研究をますます進めてゆかれると共に、他の一面では、學界に種々の事業を起されるやうになつたので、それはさうのづから上記の計畫の實現となつたのである。

## 七 大學教授就任、東洋學報創刊、滿鮮史研究機關の設置



ヨウロッパから歸られた博士は、旅装を解くと共に、常の如く書齋の人となり、三十七年には「大秦國及び拂菻國につきて」の雄篇を發表せられ、三十八年には「國語と外國語との比較研究」、三十九年から四十年にかけては「蒙古民族の起源」の、何れも長篇を公にせられた。第一は、ヨウロッパの東洋學者の間に種々の説があつてまだ解決せられてゐない難問題に對して、博士の獨自の見解を述べられたものであり、また第三は、これまでヨウロッパの學者の通説に從つて、匈奴をトルコ種と考へてゐられた博士の舊説を改め、それをモンゴル種とする新説を述べられたものである。歸朝まもなくこのやうな業績を學界に提供せられた博士の學問的熱情と、ヨウロッパの學界に對する日本の學者としての抱負とが、そこに現はれてゐる。この間なほ古代朝鮮語及び我が國語についての、また滿洲及び西域に關する、幾篇かの論文が書かれてゐるが、一それをごゝには擧げない。また學界に於ける公人としては、依然として學習院教授の任にありながら、三十七年には、帝國大學より迎へられて、文科大學の教授を兼任せられることになつた。

文科大學の史學科では、來朝以來十餘年間、學生を指導して來たリースが、幾度も繼續せられた任期が満ち、三十五年に職を去つて歸國した。博士のヨウロッパ留學中のことである。これは、史學科がヨウロッパ人の教師なくして存立し得るほどに、我が國の史學が發達したことを示すものといへよう。しかし、史學科と國史學科との並存してゐる制度は、もとのまゝであつた。史學科では坪井氏が前から史學研究法を講じてゐたが、それは主としてベルンハイムによつたものであつたので、このことは、當時の史學科に於ける史學思想の如何なるものであるかを、知るたよりもなることのやうである。また支那史の講義は、二十年代の末期から那珂氏がそれを擔任せられ、後、市村氏がそれに加はられたが、那珂氏の講義の題目には、塞外に

關するものもあり、支那史が、名稱ばかりでなく、その實質に於いて、いはゆる東洋史に變つてゆく素地の、漸次形づくられて來た迹が見られる。ところが、三十七年に文科大學では學制が改革せられて、哲學、文學、史學の三科が置かれ、史學科では、卒業試験の受験學科として、國史學、東洋史學、西洋史學の三科が定められた。史學科と國史學科との並存してゐた制度は、かくして解消したと共に、新に東洋史學と西洋史學との稱呼が用ゐられたので、大學の制度として、これらの名の用ゐられたのは、この時からのことであり、東洋史についていふと、從來の支那歴史が東洋史學と改められたのである。博士は「漢文支那語學第三講座分擔」の名の下に史學科の講義を擔任せられ、東洋史を講ぜられることになつたが、その最初の講義題目は「支那に關する西人の著書一斑」と「支那北部に據れる民族の歴史」との二つであつた。この時から那珂氏は大學を去られたので、東洋史の教授は博士と市村氏とになつた。これから後も、概していふと、支那史は市村氏が擔任せられ、博士はいはゆる塞外諸民族、滿韓及び西域に關する講義を擔任せられたが、後にはまた、市村氏と隔年に交代して、東洋史概説をも講ぜられることになつた。博士の講義は、博士自身の研究の教室に於ける實演ともいふべきものであつたので、博士に獨自な研究の方法がそれによつて學生の前に展開せられ、學生をして、學問の研究に於いてものづから準據とすべきところを知らしめた。かくして、東洋史界に於ける一つの學風が、博士の指導によつて、次第に形づくられるやうになつてゆくのであつた。

しかし博士のしごとは、これだけではなかつた。博士は上にも述べた如く、我が國の東洋學の振興のために、種々の事業を計畫せられたのである。時は恰も三十七八年戰役に際し、東洋の指導者としての我が國の威力が、世界に向つて現實に示されつゝあつたので、學問に於いてもまた、一日も早くヨーロッパの學界と

肩をならべるやうにならねばならぬといふ、かねてからの博士の意見が、それによつて一層強められ、その上に、東洋の研究に於いては、新しい學問的研究のまだ幼稚な支那の學界を指導すると共に、世界の東洋學研究に寄與すべきしごとをしなければならぬ、と考へられたのである。その事業の第一は、學會の設立であり、鳥居龍藏氏等と共に熱心にそれを主唱し、幾多の困難にあひながら、その實現のために奮闘努力せられたので、三十八年に、一たび亞細亞學會の成立を見るに至つた、けれども、學會としての事業を開始しようとする、また種々の困難が生じた。それがために博士は百方苦慮し、種々の畫策をせられたが、四十年になつて東洋協會と合併し、その學術調査部として、東洋學の研究に従事することになつた。「東洋協會調査部學術報告第一冊」は、その最初の業績として、四十二年に出版せられたが、後になつて、東洋學報の名で、定期刊行の學術雜誌を發行することになり、四十四年に、その第一卷第一號が學界に送られた。それから後、引續き發行せられて、今、卷數は二十九卷に達し、冊數は通算して一百六號に及んでゐる。新しい研究と研究者とが、それによつて多く世に現はれ、我が國に於ける東洋學研究の中心機關として、内外の學界に重きをなしてゐる。

その第二は、滿洲及び朝鮮の歴史を研究するための機關を設けられたことである。戦役が終つて、滿鮮地方に我が國の權威がうちたてられ、政治的にも經濟的にも種々の施設がそこに行はねばならぬやうになつた。これには、當時に於いては、この地域についての學問的研究が、全體として、まだ甚だ幼稚であつた。これは、學問的研究の結果を基礎としなければならぬ實際的施設の上の必要からも、また學問そのものとしても、遺憾のことであつたから、博士は、その研究の一部面としての史學的研究をなすべき機關を設け

ることの必要を痛感し、時の南滿洲鐵道株式會社總裁後藤新平氏に説いて、その東京支社に、滿鮮史に関する調査室を設けることの承諾を得られた。この方面の歴史的研究は、ヨウロッパの學者のまだ手の届かないところであるから、純粹なる學術上の問題としても、日本人が、それをしなければならぬ、といふ考が博士にはあつたのである。そこで、博士は數名の壯年學徒を選んでその研究員とし、みづからそれを主宰して、明治四十一年に、この調査室に於いて研究を始められた。滿鮮に關する歴史的研究は、上に述べた如く、既に二十年代から、諸家によつてその端緒が開かれ、博士みづからの研究も、朝鮮史から出發せられたのであるが、組織的に系統だてゝそれを行はうといふのが、この調査室に於ける博士の企圖であつた。これが、今日盛になつてゐる滿洲史及び朝鮮史に關する學術的研究の、少くとも東京の學界に於ける、搖籃の場所であつたのである。この調査室の第一次報告は、「滿洲歴史地理」二冊、「朝鮮歴史地理」二冊及び「文祿慶長の役」一冊として、大正二年に公にせられ、「滿洲歴史地理」はそのドイツ語譯も出版せられた。然るに三年に至り、會社の事情により、調査室が閉鎖せられたので、この事業は半途にして中絶する外はないやうな情勢となつたが、博士は深くこれを遺憾とし、諸方面に交渉折衝を重ねられた結果、會社の支持を條件として、東京帝國大學文學部がそれを繼承することになつた。従つて、これから後も依然として、博士の主宰の下に研究が續けられ、今年に及んだのである。四年に第一冊が發行せられ、卷を重ねて十六冊に至つてゐる「滿鮮地理歴史研究報告」は、その研究の成果を纂輯したものである。

南滿洲鐵道株式會社の調査室に於いて行はれた事業として、なほ注意すべきは、研究に要する圖書や遺物の蒐集と滿洲の實地踏査とである。博士は、ヨウロッパ留學中にも、多數の書籍雜誌を購入して歸朝せられ

たが、この調査室のためには、支那及び朝鮮の圖書の蒐集をとめられ、特に朝鮮の史籍に至つては、唯一無二の寫本の類をも獲得せられた。これらの圖書は、白山黒水文庫の名によつて、調査室の所藏となつたが、後、東京帝國大學に移讓せられた。なほ二年に、時の朝鮮總督寺内正毅氏に説き、總督府をして李朝實錄一部を同大學に寄贈せしめられたのも、また博士の盡力の致すところであつた。惜しいことには、これらの圖書は、十二年の大震災に於ける大學圖書館の炎上によつて、概ね燒盡し去つた。また史學的研究のための滿洲に於ける實地踏査は、我が學界の最初の企圖として、明治四十二年に、博士及びその率ゐられた研究員の一行によつて、行はれたのであるが、博士みづからは、渤海の舊都及び金の上京の遺趾を探求して、その所在をたしかめ、種々の遺物を採集せられた。遺物の採集もまた博士のかねてから注意せられたところであつて、明治三十九年に滿鮮を旅行せられた時には、鴨綠江北岸の輯安縣に存在する、高句麗の廣開土王の碑を我が國に移さうとする計畫をたて、諸方面の贊助を得られたことがある。それは、運搬費の巨額に上るために、實現せられずに終つたが、滿洲の考古學的研究は博士によつてその端緒が開かれた、といつても過言ではあるまい。この時、博士は歸路ウラヂオストックを訪ひ、その東洋學院を視察せられた。

このやうにして、東洋學振興のための博士の企圖は、着々として實現せられて來たが、博士自身の研究も、またこれに伴つて進展をつけた。さうして從來の研究が、主として史學雜誌によつて發表せられてゐたのを、これから後には、東洋學報がそれに加へられることになつた。今、四十年から四十五年ころまでに公にせられた主要なるものを舉げると、言語に關するものでは「日韓アイヌ三國語の數詞について」、「支那の數詞の構造」があり、滿洲地方に關しては、「梁書の扶桑國について」、「東胡民族考」の長篇及び「肅慎考」、

西域については「西域史上の新研究」、朝鮮については「漢の朝鮮四郡疆域考」がある。このうちで、數詞を考へられた論文の日韓二國語に關する部分は、これまで一般に、我が日本語と朝鮮語とは同じ系統に屬するものとせられ、従つてまたその他の種々のことがそこから考へられて來たので、博士も、はじめのうちは、それに従つてゐられたのを、長い間の研究の結果、それは誤つてゐることを發見せられ、日本語と朝鮮語とは別の系統のものであり、従つて從來の考は訂正を要することを示唆せられたものである。朝鮮語はウラル・アルタイ語系のものであるが、日本語はそれとは違ふ、といふ博士の新見解が、このやうにして次第に形づくられて來たのであつた。また東胡民族考は、史上に見える東胡を今のトゥングース種と見るものが多いヨウロッパの學者の蒙を啓き、その根幹はモンゴル種であることを、言語の上から證明せられたものであるし、扶桑國に關するものは、梁書の扶桑國は、實在の國ではなくして、僧徒によつて構造せられた紙上の土地であることを考へられたものであつて、いづれも劃期的の論文である。また我が國に關することでは「倭女王(卑彌呼考)が發表せられ、支那については「支那古傳説の研究」、それを更に展開させた「尙書の高等批評、特に堯舜禹について」、及び「儒教の源流」が公にせられた。卑彌呼考は、博士としては、我が國の上代史に關する問題を主題とせられたまとまつた論文の、最初に公にせられたものであつて、我が上代史を、支那及び半島の歴史との關聯に於いて、考察しようとする、博士の研究法の一例が、それによつて示されたと共に、我が上代の説話の批判と解釋とのそれに含まれてゐることが、注意せられるし、尙書の高等批評は、支那傳説の批判的研究として、支那の上代史に關する大問題に一解釋を與へられたものであり、博士の研究の領域が支那思想史にまでひろげられて來たことを、語るものである。博士の研究に、傳説の批判、史料の検討が、

或は主題として取上げられ、或は方法として用ゐられてゐることは、その初期からのことであつたが、それが、この時代になつて、ますます進展して來たのであり、扶桑國についての考も、またその例の一つである。また博士の研究には、いかなる問題についても、早くから思想的考察が重大の要素となつてゐたのであるが、この傾向もまた、この時代になつて、ますます著しくなり、傳説の批判に於いてはいふまでもなく、數詞の研究に於いても、朝鮮四郡疆域考に於いても、それが基調をなしてゐる。なほ四郡疆域考に於ける眞番郡の位置の考定については、遼東及び朝鮮方面に於ける當時の形勢の觀察が、主要なる根據となつてゐて、それによつて文獻上の記載を批判せられたところさへあるが、卑彌呼問題について、これから後、次第に展開せられてゆく博士の見解には、やはりそれが重要な觀點となるのである。これは、史料の少ない場合にこのづから採らるべき方法でもあるが、また博士の史眼のひらめきでもあるので、博士の研究には、どの問題についても、多かれ少かれ、この形勢論がはたらいてゐる。さうしてそこに、遺存せる僅少の史料を機械的につなぎあはせることによつては、事の真相がつかめない、とせられた博士の見解があらはれてゐるのである。この形勢論の大規模なのが、亞細亞の歴史は南北二勢力の對抗史であるといふ、博士に獨自な、見解であつて、大學で講ぜられた東洋史概説は、この見解を根幹として形成せられてゐた。これには博士の哲學的な頭腦のはたらきもあるので、博士の研究には、直觀と思惟との力が重要な地位を占めてゐる。しかし、上記の諸問題に對する博士の解釋は、必ずしも當時の學界に於いて一般に承認せられたのではないので、四郡考はしばらく措き、卑彌呼考にも、尙書の批評にも、反對の意見があつた。一つは京都の帝國大學の機關雜誌に現はれた内藤虎次郎氏の見解であり、一つはいはゆる漢學の方面に生じたものである。

三十七八年戰役の終つたころからは、我が史學界にも、種々の新しい活動が現はれた。その一つは、三十九年に京都帝國大學の文科大學が開設せられ、翌四十年からそこに史學科が置かれたことである。京都帝國大學では、はじめ文科大學の教授として、博士を招聘したい希望があつたといふことであるが、博士にはそれに應ずる意が無かつたので、新置の史學科に於ける東洋史の部面には、桑原鷹藏氏と内藤氏とが活動せられることになり、さうして内藤氏の學問の傾向は、清代の考證學の傳統を多分にもつてゐた支那哲學科との連繫によつて、支那學の名による一種の學風を次第に形づくつてゆくやうになつた。このやうにして、東京に於ける東洋學と京都に於ける支那學とは、ちのづから、その學風を異にする一面を有することになつた。卑彌呼問題に關する博士と内藤氏との意見の對立は、必ずしもかゝる學風と關聯して解するを要せず、また勿論、兩大學を背景として見るべきものではないが、卑彌呼の居所たる邪馬臺を九州の某地とする博士の説と、それを大和にあてる内藤氏の見解とには、史籍の記載に對する批判の態度及び解釋の方法のちがひが、現はれてはゐるのである。

一方、東京の學界では、思想的には、いはゞ前代からの傳統による儒家的態度を繼承した、漢學が存在してゐた。博士の尙書の批評に對する反對の聲は、この方面から舉つたのである。それには、必ずしも偏固な舊習尊信の態度によつてではなく、學問的な考察を根據にしようとする意圖があつたのではあるが、古典批判の精神と方法とに、正しき理解の無い考へかたであつたやうに見える。現代の學問的な眼孔からは、堯・舜・禹を實在の人物と見ることは、甚だ困難であるので、考も考へかたも違つてはゐるけれども、既に明治十五年に堯・舜は孔教の偶像である、といふ井上圓了氏の説が現はれてゐたほどである。博士は常に儒教思



想を尊重し、その道德的教訓の價値を十分に認めてゐられた、また常に上代支那思想の歴史的意義を明かにしようとしてゐられた。それで、尙書の批判の主旨は、それに記載せられてゐる人物と、その事蹟として語られてゐることとは、客觀的存在としての歴史的事實ではなくして、かゝる思想の説話的表現であり、その意義での思想上の事實である、といふのである。博士の見解は、反對論者のいつたやうに、「堯・舜・禹の抹殺」ではなく、却つてそれを、正しい意味に於いて、生かしたのである。博士の傳説もしくは説話の批判は、いつでもみな同じ精神から出たものであつて、説話が事實でないために價値が無いものやうに考へるのは、その精神と方法とが全く違つてゐる。かつて學界の一方面に行はれてゐた啓蒙主義的・合理主義的批判の態度は、博士によつて根本的に修正せられたのである。しかし、このことが反對論者にはよく理解せられなかつたやうである。

博士の研究は、その學問的事業と共に、このやうに進展して來たのであるが、博士の心事としては、それは、明治の聖代に生をうけてゐるものが、智識を世界に求めて大に皇基を振起すべしといふ聖旨を奉じて、學問の上から、國運の發展に力の及ぶ限りの貢獻をしよう、といふ衷情から出たことであつた。

## 八 東宮御進講、博士の人格の圓熟

四十五年の夏、明治天皇は崩御あらせられ、國を擧げての悲歎の裡に、世は大正の時代に移つた。まもなく、學習院長の乃木希典氏が薨去せられた。當時、博士は文科大学教授が本官であり、學習院教授は兼官であつたが、さし當つて、院長事務取扱を仰付けられた。ところが、乃木氏の後を承けて院長たるべき人格と

徳望とを有するものは、博士を措いて他にその人が無い、といふことに、宮内省當局者と學習院關係者との意見が一致し、博士を院長の適任者として推薦するに決したので、その意を博士に傳へて内諾を求めた。けれども、博士は諸方面から百方勸説せられたにかゝはらず、終にこの榮職をうけることを固辭せられた。博士の意を付度すれば、博士は、どこまでも、自己の任務を學問の研究にありとし、この任務を盡すことによつて國家に奉仕しようとせられ、大正の新なる御代のはじめに當つて、一層この決意を固められたのであらう。ところが、その翌々年の大正三年に、東宮御學問所が設けられるに及んで、その御用掛を仰付けられ、東宮殿下に歴史を進講し奉ると共に、御學問所の教務主任たることを命ぜられた。博士は、はじめは拜辭せられたけれども、當時の事情に於いては、かくすることは却つて臣子の分を全くする所以でないことが知られたので、謹んでその命を拜受せられたのである。これより後は、心を傾け力を盡して、御進講の務に服されると共に、毎日必ず所定の時間中、御學問所に出仕して、教務を綜へ、また或は御用掛の推薦に參與し、或は教科書を謹撰せられるなどのことがあり、夢寐の間にも御學問所のことを忘れず、九年に殿下が御渡歐あらせられるに至るまで、七年の長きにわたつて、精勵恪勤、よくその重任を果された。このやうな重任を負ひてゐられたため、學習院に於いては授業の擔任はせられなかつた。

しかしこの間にも、大學に於ける講義はいささかも怠られることがなく、博士自身の研究にも少しの弛緩を見せられなかつた。二年ころから十年ころまでに發表せられた主要の論文としては、言語を主題とするもの「朝鮮語と Ural-Altaï 語との比較研究」の長篇、滿洲及び朝鮮方面については「丸都城及び國內城考」、「室韋考」、北方民族については「可汗及び可敦稱號考」、また西域方面については「大宛國考」、「罽賓國考」、

「塞民族考」、支那については「周代の古傳説について」がある。「元朝秘史」の蒙古語還譯の大事業も、また大正の三・四年ころから六年にかけて行はれた。これらの研究には、多方面にわたる豊富な知識が利用せられてゐると共に、鋭い直観と深い洞見とがはたらいてゐて、一面では、徹に入り細を穿ち、その考察が精緻を極めてゐると共に、他面では、規模と構想とが雄大であつて、この両面がかね具はり、相倚り相俟つて主題の研究が展開せられてゐるのであるが、このやうな博士に特異な研究の方法は、このころに至つて完成せられたといつてもよい。なほ我が國のことに關しては「古傳説に見えたる和邇について」、「所謂神龍石について」、「邪馬臺國について」などがある。博士は久しい前から我が國の古典の研究に思を潜め、その記載は、上代人の思想と精神との表現として、解すべきものであつて、民族の由來などに關する歴史的事實をそれによつて知らうとするのは誤である、とせられてゐたが、それと共に、尊嚴なる國體の本質と、我が皇室の萬世一系であらせられる眞の理由とについて、世間普通に行はれてゐる説とは著しく違つたところのある、さうして古今にわたつての歴史的事實に本づいた、透徹せる見解を有つてゐられた。

このやうに、断えず種々の業績を發表してゐられたが、研究は概ね夜間に於いてせられ、講義の準備も論文の起草もまた同様であつたので、博士の睡眠時間は甚だ短かく、五時間を超えることは殆ど無いと、博士みづからいはれてゐた。これは博士が健康であつたからであるが、それと共に、研究そのことが、一つは努力であつたけれども、一つは、楽しみであつたからである。博士は他に娛樂が無く、研究が娛樂であつた。博士のまだ若かつた時代のことであるが、二つの問題の研究が、かたづいて、次の問題がまだ明かな形を具へない場合があると、それほど空虚を感じる時は無い、と筆者に語られたことがある。また後になつてのこと

であるが、研究の結果を論文として發表するのは、學者の責任だからするのだが、自分だけからいふと、興味があるからではなく、むしろいのは研究そのことであると、屢々話されてゐたので、それを記憶せぬものは幾人もあらう。博士の研究には、論文の形で發表せられずに終つたものが少なくないので、それは次から次へと新しい問題が研究せられたため、前の研究を論文としてまとめられる暇が無かつたからであるが、その根柢には、博士のかういふ気分がある。休養のための旅行といふやうなことは殆どせられず、極めて稀に温泉などにゆかれても、二日と滞在せられることはなかつたといつてよいほどであるが、これは研究材料としての書物が座右に無くては、一日も過ごしがたく思はれたからである。このやうに研究が娯樂であつたから、一面の意味では努力であつたけれども、それによつて疲勞を來すといふことは無かつたのである。晩年、病床に横はるやうになられてからも、枕頭に常に種々の書を置いて、心にかけてゐられた幾つもの多年の宿題に、それ／＼解釋を與へようとせられたので、後にいふやうに、そのうちには、論文として發表せられたものもある。また同じ病床で、はじめて深くベルシャ語を修得せられたので、この語に通ずることができたと思はれたのは、薨去の前數日のことであつたといふ。博士は眞に研究を好み、學問を愛した人であつた。業績の豊富なのは、これがためであつて、いかに忙しい時でも、研究は休止せられなかつた。

しかし、博士は決して、學問以外のことに無關心であつたり、人の生活が學問だけでできると思つたりするやうな、偏固な學究ではなかつた。博士は、學問は人間生活の最も深奥なところに根柢と由來とがあり、人間の心の活動の最も高いものの一つであること、學問には學問そのものとしての、意義と價値と權威と使命とのあること、さうしてそれはまた人類一般の文化を進めてゆくはたらきをすることに世界的の性質の

あるものであること、を確信せられたと共に、いかなる學問でも、學問を盛にするといふこと國が民の精神生活を高め、文化内容を豊かにし、さうしてさうすることによつて、ちのづから、我が國の地位を世界に高め、國運を隆盛にするものであること、また學問的研究によつて得られる正しい知識が國家の經營施設の基礎となるといふ意味に於いて、學問は國家の活動に直接の貢獻をするものであることを、十分に認識せられてゐたので、既に述べたやうな種々の事業は、一つは、このやうな國家的意義をもつものとして企てられたのである。博士には、常に學問と國家及び社會とを結びつけようとする考があつたので、いはゆる象牙の塔に立てこもることを誇とするやうな態度は、少しも無かつた。博士は、或は新聞雜誌の請により、或は何等の會合のための依頼により、時局に交渉のある問題についての意見を述べられたことも屢々あるので、それは三十七八年戰役當時からのことであるが、このころになつても、また同様であつた。二三の例を擧げてもみるならば、支那に革命があれば、「支那歴代の人種問題を論じて今回の大革命の眞因に及ぶ」とか、「支那の國體と中華民國の現狀」とか、「支那時局觀」とかが、またははゆる第一次の世界戦争がはじまれば、「史上より見たる歐亞の大勢」とか、「世界に於ける日獨の位置」とかいふやうなものが、公にせられてゐる。しかしこれは、博士としては、どこまでも學問的見地に立つて、時局についての正しい認識を一般社會に與へよう、といふ考から出たことであつて、時勢に順應するやうな言説をしようと思はれたのではない。時局に特殊の關係のないことについても、同じやうな事情から、往々通俗的な意味を帯びた講説を、種々の場合に試みられたが、これもまた、學問的立場から、正しい知識を世間にひろげようと、せられたためであつた。特に我が國體の本源と精神とに關しては、一方では、それについての精到な學問的研究をせられると共に、他

方では、それについての正しい理解を國民に與へることに努力せられたので、「日支兩國國體異同論」とか、「國體と儒教」とか、または「皇道の根本義につきて」とかいふやうなものに、それが現はれてゐる。「大嘗會の根本義」もまた、このことに關係がある。しかし、通俗的な講説に於いても、學問上の見解を曲げたり曖昧にしたりせられるやうなことは、決してなかつたので、どこまでも學者としての立場を嚴守しようと思はれたことは、いふまでもない。

博士のこのやうな態度は、學問的研究そのことの上にも現はれてゐる。博士は、自己の専門とするところが恰も學問の全體であるかのやうな錯覺を、ともすれば、起しがちな學者とは違つて、學界が廣大であり多方面であつて、種々の學問は、互に相倚り相俟つて、眞理の探求ができるものであること、自己の専門とするところはその一部分一面に過ぎないこと、さうしてまた、それは學問の全體に對して、その特殊の地位と任務とがあることを、明かに認識した上で研究をせられ、言語學、考古學、神話學、民俗學もしくは地理學、地質學などの、それ／＼の研究の成果を、いつも考慮に加へてゐられた。博士の知識は廣かつたが、それは單に廣いことを求められたからではなく、如何なる問題についても、深くそれを考へようとすれば必ず廣い知識を要することが、長い間の研究によつて、おのづから體驗せられたと共に、こゝに述べたやうな態度がそれに伴つてゐたところから、得られたことである。博士が常に過去の自己の研究に對して再三の検討を加へ、たえずそれを補訂したり根本から考へなほしたりせられたのも、このことと關係があるので、自説として公にしたものに固執せず、それを絶對視するやうなことはなほさら無く、研究の進むと共に、卷の缺陷なり不満足な點なりが發見せられると、虚心にそれを改められ、また他の學者の説に取るべきものがあれ

ば、すなほにそれに従はれ、教をうけたものが反對の意見をたてても、喜んでそれをきかれた。卑彌呼・邪馬臺の問題についても、大秦國及び拂菻國の問題についても、或はまた數詞の問題についても、同一問題に長年月にわたつて反覆考究せられ、數次の論文として發表せられたのも、このゆゑであり、その他の問題についても、局部的には、このやうな改訂を重ねられたものが少なくない。學説を改めることは研究の進歩を示すものである、といふのが博士の考であつた。しかし、博士自身に正しいと信ぜられた見解については、どこまでもそれを主張せられ、もし反對説があれば、それを縦横に論破せられた。ヨウロッパの學者の見解の誤謬を指摘せられる場合の如きがそれであるが、卑彌呼・邪馬臺問題についても、尙書の批評についても、同じ態度をとられた。どの問題に於いても、學問上の見解を立てるについては、世評の如何の如きは、毫も顧慮せられず、敢然として論ずべきを論ぜられた。自説を改められるのも、それを徹底的に主張せられるのも、みな學的良心の命ずるまゝであつたのである。

博士の人に對し社會に對する態度も、また學問に對するのと同じであつた。人には各々その個性があり、特殊の境遇や、地位や、職業や、生活状態があり、人がみな學者でないことは勿論であるから、そのれを以て他を律したり、人はみな同じやうなものと思つたりしてはならぬ、特に現代は、思想や知識の點に於いて、社會に幾多の層があり、その間の差異が著しいから、世に立つて事をなすには、その心得が無くてはならぬ、また人にはみな何等かの短所があり缺點があるから、人を完全なものと思ふことなく、その長所とよき側面とを見る必要がある、といふのが博士の考であつて、何人に對しても、その個性を尊重し、地位や、職業や、または思想の傾向、知識の程度を顧慮し、それに適應するやうな態度をとることに注意せられ、後

進についても、その長所を見て世に推轡せられ、缺點があるために見ずてるやうなことをせられなかつた。世間に學問を理解するものの甚だ少いことを、常に慨歎してゐられたが、徒らに憤懣することなく、いかにしてそれを理解させるかに、苦慮もし工夫もせられた。みづから持することは謹直であつたが、人をば寛恕し、如何なる場合にも怒を發せず、常に溫容を以て接せられた。人の缺點を知つてゐられても、それを口に出されなかつたことは、いふまでもない。みづからは他人を煩はさぬやうに努められたが、他人のためにはよく計られ、さうして已むを得ざる場合でなければ、そのことを語られなかつた。博士の庇護をうけながらそれを知らずに過ごした人も、少なくないであらう。感傷的な點は少しも無かつたが、情には篤く、勞を厭はず費を吝まずして、故舊門下のために力を盡された。或はまた、人を率ゐる事をなすにも、細節に拘泥せずしてよく大綱をすべ、業を強ひず功を急がずして、ものづから成ることをつとめられた。博士みづからは、名を求め地位を求める考が少しもなく、社會的地位がものづから高くなられた後でも、さういふ地位にあるといふやうな氣分も態度も全く無かつたが、他人の社會的地位をば重んじ、かりにも社交上の禮儀を輕んずるやうなことは決してせられなかつた。すべて社會的秩序を尊重せられたので、學位の如きも、既にさういふ制度のある以上、それを輕視すべきではなく、適正な効果があるやうに運用すべきである、とせられた。學位を得んがために研究するものをば好まれなかつたけれども、まじめに研究に従事してよき業績を擧げた學者には、學位をもたせるやうに盡力せられた。要するに、博士は、學者としては、どこまでも純なる學者であつたが、社會人としては、高い意義での常識に富んだ人であつたのである。しかし、社會人としても、徒らに世間に順應しようとせられたのではなく、博士みづからの主張と操守とを曲げることは、決してせら



れず、是非善惡の別を明かにせられた。人を包容せられたけれども、清濁並せ吞むといふのではなく、よく人物を観察甄別せられたので、濁者はあつから近づかなかつた。徒らに人と争ふことはせられなかつたが、意見を述べなければならぬ場合には、明かにそれを述べ、反對論があれば、その誤れる所以を説いて、論者みづからその非を悟るやうにつとめられ、主張すべきことは、どこまでも主張せられた。

なほ博士の人となりを知るについて重要なことは、みづからは富を求める念を少しも有たれず、金錢には極めて淡泊であつたが、富そのものは一つの力でもあり、金錢は社會的に必要なたらきをするものであるから、徒らにそれを卑しむのは誤であり、たゞそれを求むるにも用ゐるにも、あつからその道がある、とせられたことである。みづから奉ずることは質素であつたが、他人のためには財を散ずることを惜まれなかつたのも、このためである。これも博士の壯年時代のことであつたが、そのころには、一般に待遇の薄かつた學者が、いくらかの収入を得る道は、教科書を編纂することであつたので、博士は或るとき筆者に、収入は少いよりも多い方がよく、金錢は無いよりも有る方がよいが、一度び収入を得る道に近づくと、それに心のひかれ易いのが、人間の弱點であり、それに心がひかされると學問の研究のよろそかになつてゆく虞があるから、自分はそれに近づかないやうにする、と話されたことがある。たゞ上にも述べたやうに、明治十八九年のころ、一度だけ、書肆の懇請によつて西洋史の教科書を書かれたことがあるが、これは當時よい教科書が無かつたためであつたので、それから後は、いかなる書肆がいかに懇請しても、決してそれに應ぜられなかつた。金錢などは眼中にないといふやうな豪語をせられず、金錢に人を誘惑する力のあることと、あつたのれみづからも人間としての弱點をもつてゐることを認めて、その誘惑にかゝらないやうにみづから警戒

する、と語られたところに、博士の人間の情味と強い意志とが見えるのである。博士が、那珂氏の懇請によつて、幾年かの間、高等師範学校の講師となられたことがある外には、他の学校の講義をひきうけられなかつたのも、同じ理由からであつたらうと、推測せられる。

博士のかういふやうな性情は、少年時代からの長い年月にわたる修養の致すところであつて、身を擲つて學問的研究に邁進せられ、學界に大なるはたらきをせられたのも、かゝる修養の結果であるが、學問的研究そのものが、またそのづからなる修養ともなつて、次第に特異の人格がつくり上げられたのであらう。學問に對する態度としての眞摯と誠實と、また學問のためには如何なる困難にもうちかち何事にも屈せざる忍耐と勇氣とは、一つの意味では、高い人格の現はれであると共に、他の意味では、このやうにして學問に生命をうちこんでゆかれたことが、全體としての人格の形づくられて來た根幹となつたのもあらう。博士が學習院の院長に擬せられたのも、東宮御學問所の御用掛を仰せつけられたのも、かくの如き人格のゆゑであつた。學界のために企圖せられた事業が、或はその實現の道程に於いて幾多の困難があつたにかゝらず、終に成立を見るに至り、或は進行の途上に於いて一たび中絶の厄に遭ひながら、更生復活することができ、さうして何れも、博士の主宰の下に、着々として、業績の擧がつて來たのも、こゝに述べたやうな博士の人格によるところが多かつたのである。博士は、事業の計畫に當つても、大體の目的と方針とを定められるのみであつて、事務的に細目を整へるといふやうなことは考へられなかつたけれども、計畫が實現すると、事務はそのづから運轉してゆくのが常であつたが、これもまた同じ理由からであつた。大正の初期には、博士は五十歳前後であつて、このやうな人格の圓熟して來た時であつたが、それから後の幾年間かは、博士が、

公の職務についても、學問上の事業についても、同時にまた學問的研究そのことに於いても、最も多く活動せられた時期であり、博士の人格の大に光を放つた時であつた。

博士の事業の第三として擧ぐべきものは、東洋文庫の經營であつて、この文庫が、現に見られる如く、學界に大なる貢獻をするやうになつたのも、また博士のこの人格の致すところであつた。この文庫の基礎が置かれたのは、大正六年であつて、岩崎久彌氏が、モリソン文庫の全部を購入したことがそれであるが、直接に岩崎氏を動かしたのは、井上準之助氏と小田切萬壽之助氏とであり、さうして兩氏をして、この購入が我が國の學界にとつて必要であることを、確信せしめたのは、博士と上田萬年氏との力であつた。上に述べた如く、博士は機會のあるごとに、ヨウロッパ及び支那・朝鮮の圖書の蒐集をせられたのであるが、書物を骨董的に愛翫せられたのではなく、従つて必ずしも、それを自己の所有としようとはせられなかつたので、博士によつて蒐集せられたものの多くは、或は學習院の、或は東京帝國大學の、或は成田圖書館の、また或は東洋協會の藏本となつてゐる。要するに、それらの圖書が我が國に存在し、我が國の學徒がそれを利用することができれば、それでよい、とせられたので、蒐集の際の事情と便宜とによつて、それらは諸所の所藏に歸することになつたのである。ところが、岩崎氏の購入したものは、その分量の豊富な點からも、またその購入の事情からも、それに本づいて獨立の圖書館を設けることが、できもするし、必要でもある、と考へられたので、そのため、この文庫を基礎として更に必要な圖書を漸次増加し、東洋研究のための一大圖書館としようといふ岩崎氏の企圖を贊助し、その創業の事に關與盡瘁せられたのである。かくして形成せられたものが、即ち後の東洋文庫である。

なほこゝに附記すべきことがある。博士は、かねてからの懷抱を實現させるには、東洋學報の發刊、滿鮮史研究機關の設置だけでは、足らないところの多いことを、感ぜられてゐたし、一方では、革命後の支那の國情が、未だ安定の域に達せずして、種々の混亂がその間に生じてゐると共に、他方では、ヨーロッパに起つた大戰役が、世界の形勢に種々の變化を與へ、東洋に於ける我が國の地位と責務とを、ますます重くして來たこのころになつては、東洋に關するあらゆる分野の學問的研究を盛にして、大陸に對する文化的、政治的また經濟的施設の基礎としなければならず、同時に、我が國のこの方面に於ける學問的研究を、世界に於ける最も有力なるものによつて、進めることによつて、支那人をして我が國の學問、我が國の文化を尊重せしめ、さうしてそれによつて、中心から我が國に信賴する念を起させることが、いよゝ緊要となつたことを知られ、この場合に、もしそれを怠つたならば、我が國は東洋に對して遠大の企圖を有するヨーロッパ人やアメリカ人の下風に立つに至るのみならず、支那人からも、また輕侮せられるやうになることを、深く憂慮せられたので、それがために、國家の保護の下に、一大研究機關を設け、その事業として、文獻による研究、探検員・調査員の派遣、研究者の養成、圖書物品の蒐集、世界に對する研究成績の發表、などを行ふべきことを、諸方面の有識者に提議せられた。これは世界戰役のまだ進行中のことであつたが、機未だ熟せずして、その實現を見るに至らなかつた。しかし博士のこの企圖のうち、東洋學に關する限りに於いては、後に東洋文庫によつて、やゝ小規模ながら、その大部分が具體化せられることになつたのである。

さて博士の經歷にたちかへつていふと、博士は八年に帝國學士院會員に列せられ、十年には兼官たる學習院教授を免ぜられて大學教授の專任となられたが、十一年（一九二三年）になつて、大學からヨーロッパに

派遣せられた。パリに開かれたアジヤ學會の創立とシャンポリヨンのエジプト文字を解讀したことの百年記念の祝典に、東京帝國大學を代表して參列し、併せてヨウロッパの東洋學界を視察するためであつた。この時は、アメリカを經由してヨウロッパに赴き、祝典に參列して使命を果すと共に、匈奴の起原に關する論文 *Sur l'origine de Hiong-nou* を朗讀して、匈奴は、ヨウロッパの學界に廣く行はれてゐる説のやうに、トルコ種ではなくして、モンゴル種である、といふ博士の見解を發表し（この論文は翌年に *Journal Asiatique* に載せられた）、次にハーグに赴き、その國立圖書館に藏せられてゐるオランダと我が國との關係についての古文書を謄寫することに關して、交渉を遂げ、更に二十年前の留學時代には訪問の機會の無かつたイギリス及び南ヨウロッパの諸國を歴巡し、歸途エヂプトに上陸して、その古蹟をたづね、當時行はれてゐた考古學的發掘の状態をも視、さうして翌十二年の春に歸朝せられた。この時にもまた、多數の圖書を購入せられたが、それは岩崎氏の依頼によつたことであつて、その圖書は、今、東洋文庫の所藏となつてゐる。

## 九 大學教授退任

歸朝の後には大震災があつたので、それがためにものづから多事の日を送られることもあつたが、この間にも東洋文庫の創設に關しては深く心を用ゐられた。文庫は、十三年の十一月に、すべての設備が整ひ、財團法人としての認可を得たが、博士はその理事に就任せられると共に、研究部の部長となられたのである。それと共に、博士みづからの研究はますます進み、十三年には「周代の戎狄について」、「粟特國考」の如き論文をひきつゞいて公にせられた。ところが、翌十四年には滿六十歳に達せられたので、定年の制により大學

教授の地位を去られた。この年、知友門弟相謀つて各々一篇の論文を草し、これを編纂して「東洋史論叢」と名づけ、博士に獻じて還曆の壽を賀した。これが、我が國の史學界に於いて、かくの如き企てのなされた初めである。

博士は、東京帝國大學の教授として、その任にあること、二十二年であつた。この間、史學界の進歩は著しきものがあり、博士の初めて任につかれた時に比べると、その面目が殆ど一新せられたやうに見える。史學そのものについていふと、その何れの分野に於いても、研究の方法が學問的になり、史料批判の啓蒙主義的態度が修正せられ、史學理論がさまざまに展開せられ、研究の主題が多方面となり、文化史の概念が明かにせられたことなどが、まづ思ひ浮かべられるし、考古學、民俗學、神話學、人種學などの史學と密接の關係のある學問が起り、宗教、學術、文藝、法制、經濟などの諸方面に於いても、それらに歴史的の研究が行はれるやうになつたことも、目につく。また世間との關係についていふと、研究者が増加し、多くの私學に史學科が設けられ、中等學校の歴史の教師として、史學の専攻者が配置せられ、史學に關する書籍雜誌が多く刊行せられるやうになつた、といふやうな事實がある。これは、いふまでもなく、我が國の文化が一般に進んで來たからでもあり、諸方面に於ける多くの學者の努力の結果でもあるが、東洋史學に關しては、多年博士とならんで教授の地位にあり博士と同時に退任せられた市村氏と共に、博士のこれに與かることが大きかつたのみならず、他の部面に於いても、直接または間接にその刺戟なり影響なりをうけたところがあつたやうである。また研究發表の機關としての東洋學報の存在が、一般に東洋史學専攻者の研究慾を刺戟したことは、いふまでもなく、滿鮮及び蒙古方面の研究者が、滿鐵の調査室及びその繼承せられた東京帝大の事業

と、直接間接の交渉をもつてゐることも、また明かである。だから、少くとも東京の帝大を中心とする東洋史學界の或る分野は、博士によつて始めて開拓せられ、そこで活動するやうになつた幾多の學者には、博士によつて養成せられたものが少なくない、といはねばならぬ。さうしてそれらの學者に、博士の學風のそれぞれの方面が傳へられたのである。廣く東洋史學界を見わたすと、例へば、京都の帝大の史學科を中心とし母體とする有爲の學者によつて種々の研究が行はれてゐる如く、博士とは直接の交渉の無い部面のあることは、いふまでもないが、博士に指導せられた學者の多いことも、また明かな事實であり、よし直接に指導をうけずとも、何等かの意味に於いて、博士の學問と事業との刺戟をうけたものに至つては、東洋史學界の全部面に普くゆきわたつてゐる、といつてもよからう。このやうな博士が、今、教授の地位を去られたのであるが、しかし博士の學界に於ける活動は、これから後も依然として繼續せられた。

## 一〇 東 洋 文 庫

大學の講席を退かれた後の博士は、東洋文庫の事業と博士みづからの研究とに、その主力を注がれた。十五年に御代は昭和に移つたのであるから、これは概ね昭和時代のことである。

東洋文庫は、法的には、大正十三年の年末近くに成立したのであるが、その事業は數年前から着々準備せられてゐたので、圖書館部と並んで「東洋學の研究及び其の普及を計る」ために設けられた研究部の事業もまた、實質的には、文庫成立の前から活動をはじめたのである。この研究部の設置は、博士の主張に本づいたものであるので、博士は、理事として、文庫の全體を董督すると共に、研究部の部長として、この部

の事業を主宰せられることになつた。この事業の主要なるものは、東洋學に關する研究論文の出版と、東洋學講座の開設とであるが、第一のについては、「東洋文庫論叢」と、ヨウロッパ文の「東洋文庫研究部紀要」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko)と、「歐文東洋文庫論叢」(Monographs in European language edited by the Toyo Bunko)との三種が、その主なるものであつて、それによつて東洋學の研究を助け、その進歩を促がすと共に、我が國の學者の業績を世界の學界に示さうとするのが、この事業の主旨である。「東洋文庫論叢」の刊行は、このやうな方法によらなければ出版することのできない學問上の論文を世に送ることによつて、直接に學界に貢獻するところが大きいのみならず、學者のためにかゝる便宜を提供することによつて、研究そのことを促進する効果もまた著しい。またヨウロッパ文の「東洋文庫研究部紀要」の編纂出版は、我が東洋學に世界的地位を與へるために、企てられたことであつて、論叢の或るものにヨウロッパ文の綱要を附載する例の開かれたのも、別に「歐文東洋文庫論叢」の刊行がはじめられたのも、また同じ主旨から出てゐる。これは博士の最も意を注がれたところであつて、博士みづからが早くから、その論文をヨウロッパの學會で朗讀せられたり學術雜誌に掲載せられたりしたのも、また滿鐵の調査室から「滿洲歴史地理」のドイツ語譯を出版せられたのも、みなそのためであつたが、こゝに至つて、その機關としての「研究部紀要」が出版せられることになつたのである。しかし、それによつて世界の學界に示さうとせられたものは、その質に於いても、量に於いても、わが國の東洋學をヨウロッパのその水準に高めようとしてられた二十餘年の前のとは、大なる違ひがある。それは、研究の主題に於いても、その方法に於いても、我が國に獨自の東洋學が、この時には、既に形づくられてゐて、それによつて世界の東洋學に寄與す



ることのできるやうになつてゐたことである。これは我が國に於ける一般文化の發達のためではあるが、直接には、博士の研究と、それによつて指導せられた學界との、進歩のゆゑであるので、この紀要によつて公にせられた博士の論文そのものに於いても、そのことが明かに示されてゐる。なほ論叢も紀要も、それによつて文庫の研究員の業績が發表せられたことは、いふまでもないが、優秀な論文を廣く學界の諸方面に求めることになつてゐるところに、それを一部分の學者の専有物とせず、一般東洋學者の公共の機關としようと思はれた、博士の意圖が現はれてゐる。なほ研究部では、學界に研究資料を提供する目的を以て「東洋文庫叢刊」を出版してゐるが、それには内外の稀觀書の複製が主なる部分を占めてゐる。その他、東洋學の研究に志す學者を養成するために、研究生の制度を設けてあることも、博士の主宰の下にあつた研究部の事業として注意せらるべきである。次に第二の事業としての東洋學講座は、毎年、春秋二季に開かれ、多くの熱心なる學徒を吸収して、この學の普及に寄與してゐる。圖書館部の事業もまた、年と共に進展し、その藏書は次第に増加して來たのであるが、その購入蒐集に關しては、博士の力によるものが多く、また東洋學圖書館としての存在と活動とが、廣く世界の學界に知られるやうになつたのも、博士の名聲によるところが大きかつた。博士は、このやうにして、東洋文庫の活動の事實上の中心となつてゐられたので、隔日に必ず文庫に出動せられ、病氣でなければ休まれたことが無く、理事會の開會またはその他の重要な事務のある場合には、病をあししてさへも、參會執務せられた。人事については、特に苦心せられたので、一々の事實をこゝには述べないが、なみ／＼ならぬ慎重の用意を以て、それに善處せられた。已むを得ざる事情のために、一時、理事長の地位につかれたことがあるが、後任を得て直ちにそれから退かれたことも、博士の心事を知るべき

一つの事實である。研究部の講座に關しても、文庫の懇請によつて、しばしば講師となられたが、できるだけ研究員や文庫の若い研究者に講義をする機會を與へ、または文庫外の學者を講師として招聘することをつとめられた。文庫の今日あるは、このやうな博士の配慮によるところが多いのである。さうして、それによつて、上に記したやうな博士のかねてから懷抱せられたことが、東洋文庫によつてほゞ實現の段階に達したのである。

博士自身の研究が、ますます進んで來たことはいふまでもない。大正の末年から昭和十四年ころまでに公にせられた主要なる論文を挙げると、西域に關するものに「條支國考」、「大秦傳に現はれたる支那思想」、「大秦傳より見たる西域の地理」、「拂菻問題の新解釋」、「大秦の木難珠と印度の如意珠」、などがあるが、これらのうちでも注意すべきは、久しい間、研究に研究を重ねられた大秦及び拂菻の問題に、最後の斷案を下され、特に、大秦傳の記載には支那思想によつて構成せられたものがある、といふ新見解が、そこに展開せられてゐることである。次に塞北方面については「亞細亞北族の辮髮について」、「匈奴の休屠王の領域と其の祭金の金人と就いて」があり、滿鮮方面に關しては「夫餘國の始祖東明王の傳説」、「東韃紀行の山丹について」があるが、講演の大要が發表せられたにとどまつてゐる「濊貊民族の由來を述べて夫餘高句麗及び百濟の起源に及ぶ」に於いては、高句麗の祖先が、夫餘から出たといふ説話が歴史的事實でないことを考證せられ、從來の通説を否定せられたものである。また同じく講演の大要のみが公にせられてゐるのであるが、南洋方面へも研究の手をのびされ、赤土國の位置についての新説を學界に提出せられたことがある。その他、言語については「高麗史に見えたる蒙古語の解釋」、「隋書の流求國の言語について」、「日本語の系統、特に數詞

に「ついで」があるが、日本語は現存の世界のどこの言語にも親縁の無い特異のものであり、従つて日本民族は世界の現存のどの民族とも親縁の無い、全く特異のものであつて、日本民族の祖先がこの島に移つて來たのは、歴史時代を距ることの極めて遠い、何時であつたかが全くわからないほどの、悠久の昔のことである、といふ博士の見解は、この最後の一篇にも現はれてゐる。また文字に關するものでは、論文として發表せられるには至らなかつたが、諺文は朝鮮に於いて獨自に創造せられたものであり、發音の場合の口の形態によつたものである、といふ新研究がある。諺文は蒙古文字などに變改を加へてきたものである、とするやうな説を、根本的に覆されたのである。なほ我が國に關しては、「土蜘蛛傳説について」があるほかに、上代思想史上の種々の問題についての、いろ／＼の考察があり、卑彌呼問題についても研究を重ねてゐられるし、やはり論文としてまとめられなかつたが、アイヌ民族の原住地についての新見解を提出せられてもゐる。これらが博士の六十歳から七十餘歳までの學問上の業績の主要なものである。なほこゝに附記したいのは、やゝ通俗味を帯びたものとして、東洋史から見た國史の特性について、しばしば講演をせられたが、それは博士の國史研究の態度が示されてゐると共に、異民族の歴史と對照することによつて、國史の特色を一般の知識人に認識させようと思はれた博士の意圖が見られる、といふことである。博士は、また滿洲國の成立した直後に、滿洲地方を中心とする極東の情勢の、古來の變遷を概説する著作を思ひたゞれたが、これは、學問的研究によつて過去の事實を明かにすることは、現在及び將來の行動の針路を示唆する用をなすものもある、といふ見地から企てられたことである。著作の準備はほどできたのであるが、研究すべき問題のなほ残されてゐるものがあつたため、まだ篇章をなすには至られなかつた。

博士の上記の諸研究は、主として、従來の如く、東洋學報や史學雜誌で發表せられたが、東洋學に關係のある諸家の古稀または還暦の、記念論文集に寄せられたものもある。博士は、かういふ論文集のために、力をこめて長篇を起草せられるのが常であつた。文庫のヨウロッパ文紀要には、殆ど毎卷、博士の論文が載せられてゐるが、それは別記の著作年表に見える如く、大正十年以後の發表にかゝる諸論文の翻譯せられたものである。この紀要の論文が、ヨウロッパの東洋學者の注意をひいたことは、ペリオがそれによつて博士の「可汗・可敦稱號考」及び「粟特考」を『Young Pao』の誌上で紹介批評したことによつても知られる。(ペリオは早くから博士の論文を讀んでゐて、「大秦國及び拂菻國につきて」のうちに述べてある博士の創見と同じことと、後に『Young Pao』や『Journal Asiatique』の誌上で、自説として發表したことがあり、「高麗史に見えたる蒙古語の解釋」を『Journal Asiatique』の誌上で紹介したこともあるが、これらは史學雜誌や東洋學報の論文によつたものである)。ルネ・ツルッセーの近著『L'empire des steppes et l'empire de l'Asie centrale』(フランクは會つての著 *Beiträge aus Chinesischen Quellen zur Kenntnis der Türkvolker und Skythen Zentralasiens* に於いて博士の「烏孫についての考」を引用し、全面的にそれに賛成の意を表したことがある。) 東洋文庫の出版物とは關係が無いが、博士の論文は、このころ支那に於いても、少からず、翻譯せられるやうになつたことを、こゝに附記して置かう。我が國の東洋學が、支那の少數の知識人の注意をひき、東洋學者としての博士の名聲が、特殊の學者の間知られたのは、久しい前からのことであつたが、中華民國となつてから、一般に學問的研究の氣運が開けて來たにつれ、我が國の學者の東洋研究に關する業績が、次第

に民國の學者に理解せられるやうになり、諸家の論文が多く翻譯せられもした。その間に於いても、博士の業績は特に尊重せられたので、諸大學の講義にも、博士の學説が引用せられるやうになつたが、民國十九年（昭和五年）ごろから後には、種々の論文の翻譯が、或は學術雜誌の上で、或は單行本として、世に現はれたのである。東洋研究は日本人の手でしなければならず、日本の東洋學者は支那の東洋學の指導者とならねばならぬ、といふ博士の意見は、このころになつて漸く實現の域に近づいて來たのである。特に支那の學者の塞外の研究は、殆ど我が國の學者の研究に依存する状態であり、さうしてそれには、博士の研究が主となつてゐる。博士の研究の方法が、從來の支那の學者のと全く違つてゐるといふことが、支那人をして博士を尊重せしめた主要な原因であるので、このやうな研究によつて、始めて日本人が支那の學界を指導することができ、學問によつて我が國の權威を支那人に認めさせることができるのである。

東洋文庫に於ける博士の活動と、博士みづからの研究及びその世界の學界に與へた影響とは、ほゞ上記のやうであるが、博士は、昭和四年に史學會が財團法人としての新組織を整へた時、その理事として、また後には市村氏と共に、その顧問として、會務に參與せられることとなり、九年に財團法人日本民族學會の成立した時には、その理事長の地位につかれ、また後に南亞細亞研究所及び北亞細亞研究所の設けられてからは、それらの所長として研究の指導をせられた。明治・大正の時代から存在してゐる種々の學會で、博士の關與してゐられたものは少くないので、それは、博士の徳望の高いことと、その學識の多方面であることとを示すものであるが、今は一々それを擧げない。なほ、昭和時代に入つてから、博士が廣島文理科大學、大正大學、立教大學、國學院大學などの懇請により、それらの學生に對して東洋史學を講ぜられたことがある、

といふ一事を、こゝに附記しよう。それらの大學に對する種々の情誼から、講席に立つことを應諾せられたのであつて、何れの場合でも、短期間の講義を終へて辭退せられたのであるが、それによつて、幾多の學生が親しく博士に接することができた。しかし、學問を離れたことで世間的なはたらきをしようとは、せられなかつた。さういふ方面で何等の地位にも就くことを欲せられなかつたことは、勿論である。博士の舊友の間に、博士が貴族院議員もしくはその他の顯要の地位を得られるやうに推薦しようとする議があつた時、そのことを聞かれた博士は、それは自分の志ではないといつて、その議の中止を強く要求せられた、といふことである。博士の精神は、どこまでも學問の研究にあつたのである。

## 一一 薨

## 去

博士は、豫備門の學生時代に、病のために一ヶ年休學せられたことがあり、大學の學生時代に、寄宿舎の火災にあつて脊骨を傷けられたことがあり、また學習院に奉職せられて後、瘰癧の切開をせられたことがあるが、その後は健康を害せられたことが殆ど無く、たゞ昭和六年に軽い中耳炎にかゝられたことがあるのみであつた。學問上の業績の極めて多いのも、學界に種々の事業を起されたのも、一つは、博士のこの健康のためであつた。昭和十年に滿洲に開かれた日滿文化協會の會合に列席せられたのを機會として、承德を経て北京に赴かれ、歸路は奉天から間嶋地方を経て朝鮮に入られたが、この時、或は軍用トラックに便乗し、或は開通後まもなく設備の不完全な鐵路によられたにかゝはらず、長途の旅行に疲勞を感じられなかつたのも、また當時七十一歳であられた博士の健康を示すものであつた。その後、文部省の依頼をうけて幾回か講演の

ために内地の所々を旅行せられたことがあるが、いつもきりつめた時間に忙がしく往復せられ、而も多数の學生に對し元氣に満ちた態度で講演をせられた。ところが、昭和十三年の秋に輕微な腦溢血にかゝられ、一時はやゝ發音の障害を感じられたが、静養につとめられたため、それも次第に快癒に向はれ、後には、上にも述べた如く、病床にありながら研究をつゞけられるやうになつた。蒙古學報に掲載せられた「プロレマイオスに見えたる葱嶺通過路について」と、この記念號の「拂菻問題の新解釋」の續稿と、また遠からず滿鮮地理歴史研究報告によつて發表せらるべき「卑彌呼問題の歸結」及び「朝鮮語の數詞」とは、かくして研究せられたところを、口授し筆記せしめられたものである。なほ神典の解釋など、腹案すでに成つて、口授の機をまたれてゐたものも、二三ならずある。このやうな状態であつたが、十六年の秋になつて、茅ヶ崎の別墅ができあがつたので、そこに移られた。人里離れた小松原、松吹く風にさそはれて、相模の海の波の音も、時にはかすかにきこえて來るところである。博士はこゝで靜かに療養と思案とに身を委ねようとせられたのである。かくてその年の冬をこの湘南の暖かき閑居に過され、今年の春の春風の吹きそめるころには、日あたりのよい庭さきに植ゑられた幾株かの桃のわか木に美しき花の咲く日の來ん年を樂しんでまたれてゐた。

ところが、三月の二十一日に風邪のために發熱せられ、二十九日には急性肺炎の症狀があらはれ、三十日の未明に危篤の状態に陥られた。牙えかへつた寒さの、まだ去りやらぬ朝であつた。我が國の東洋史學を開拓し、指導し、それを世界に於ける東洋史學としての地位に進められた白鳥博士は、かくしてその大なる功績を後にのこしつゝ、靜かにこの生を終られたのである。喪は四月一日に發せられ、葬儀は東京の本邸と青山齋場とで行はれた。墓は、豊島ヶ丘なる雜司ヶ谷の墓地の、槻の大木の並び立つところにある。

博士は、長年月の間、學習院教授及び帝國大學教授の任にあり、また東宮御學問所に奉仕せられたので、正三位勳二等に叙せられ瑞寶章を賜はつてゐられたが、四月の九日、特旨によつて新に旭日重光章を加授せられた。學界に於ける功績を嘉賞あらせられたためであると拜聞する。

## 一一一 幸福の時代、幸福の人

博士は病中しばしば家人に「自分ほど幸福なものはない」と語られたといふ。これは、一つは、博士が世に立たれてから後には、自己の經歷事業に何等の蹉跌が無く、困厄の境に陥られたことはなほさら無く、極めて平靜に學者としての生活を送られると共に、企圖せられた事業も順次にその功が擧がり、その上に、家庭の圓滿にして兒孫みな各々そのとをを得てゐられる、といふ意味に於いてであらう。博士には、ひとりきりの息子さんである令嬢をめあはされた令嗣清氏があつて、現に學習院教授として學界に活動せられ、二男一女の令孫があつて、それら學業にいそしんでゐられたのである。しかしそれと共に、一つは、國史の上にも未だ曾てそのためしのない國運の興隆、世界の歴史にたくひの無い民族生活民族文化のめざましい發展を、短日月の間に、經過して來た明治・大正から、昭和の今年に至る聖代に生を享けたことの幸福を、しみじみと感ぜられたのもあつて、このことは博士が、をりにふれて、人に語られたところである。博士は、博士みづからの幸福なる生活は、實にこの聖代の賜である、と考へてゐられた。上總の一農家に生まれられた博士が、日本の學界にあの如き功績をあらはし、世界的の事業をせられたのも、明治維新にはじまつて次第に展開して來た新しい社會、廣く世界の文物を採取して我が國の文化を發展させることに、國を擧げて努



力して來た時代、であつたがためである。博士の學問的研究が、我が國の文化の發達に伴つて、進歩して來た狀のあつたのも、必しも偶然ではない。博士は、幼少の時から、その態度が快活であつて、細事について無益な心勞をせられることが無かつたやうであり、早く世路の艱難を味ひながら、よくそれを克服せられたのも、一つはそのためであつたらしく、世に立たれるやうになつた後も、ちつとした、物靜かな、容姿言動に一つまねながら、氣分の快活さは少しも失はれなかつたが、晩年に至つて、みづから幸福を感ぜられたほどな上記の如き生活は、次第に博士をして樂觀的な人生觀を抱かせるやうになり、さうしてさういふ人生觀にあつたから伴ふものでもあつたこの快活な氣分が、また博士の學問上の研究を限りなく前進させ、企圖せられた事業をいつも遂行させる力となつたやうに、解せられる。事をなすに當つては、困難に遭遇しても、それがために初志を翻すことはなく、前途に常に光明を認めて、それに希望をつなぎ、不撓の努力と、細心な用意と、並に餘裕のあり彈力のある態度とを以て、その間に善處せられ、それによつて最後には成果を收められるのが常であつたが、これはその根本にかういふ氣分があつたからであらう。たと博士に於いては、それに強い意志が結合せられてゐたのである。博士は風景の觀賞に於いても、展望の潤大なるを好まれ、今から二十餘年の前に、目黒に新邸を營まれたのも、そのころには、廣やかな田野を見おろすことのできる景勝の地であつたためであつたが、このやうな氣分は、博士の生活のすべての方面に現はれてゐたので、如何なる場合にも、明るく事物を見てゐられたのである。上にも述べた如く、斷えざる國運の進展を我が身のこととして體驗しつつ、みづからもまた、その進展の一つの力として、それに參與しそのためにはたらいてゆかうとする、明るい希望を有つてゐたのが、明治の時代に世に出たもの一つの傾向であつたが、博士の幼

少時からの性情と閱歷とは、よくこの傾向に適應したので、それによつて、博士の學問と學問的事業とが成り、またその學問と事業とによつて、事實、國運の興隆、國民文化の發展に參加し貢獻せられたのである。さうしてその國民文化の發展と國運の興隆とが、博士みづからの心情に反映して、博士をして、みかづら、幸福の時代に於ける幸福の人たるを感ぜしめたのである。幕末の時代に生まれ、明治の前半期に人となり、その後半期から、大正の時代を経て、昭和の今年に至るまで、たゆむことなく學問上の活動をつとけられた博士の一生は、まことに、かゝる意義に於いての、幸福の時代に於ける幸福の生であつた。

しかし、これは博士みづからの情懷である。我が國の史學界、特に東洋史學界からいへば、博士が史學者として活動せられ、さうして東洋史學を今日の狀態に育成し、これから後の斯の學の發達のために鞏固なる基礎を置かれたことは、學界の大なる幸福である。世界の東洋學からいつても、極東の日本の學者によつて、その國に特色のある東洋學が建設せられ、それによつて東洋の研究がますます進められてゆくやうになつたのは、學問の使命である世界の文化を高めるために、幸福なことであるといはねばならぬ。

(昭和十七年十一月 津田左右吉 記す)

〔附記〕 この小傳の起草について、白鳥清君及び東洋文庫の和田清君と岩井大慧君とが、種々の便宜を與へられ、また板一雄君と淺野忠允君とが、資料の蒐集に盡力せられたことを深く感謝する。なほ、南弘氏の好意により、松浦鎮次郎氏から、明治初年の學制に關して、懇篤なる教示を得たことをこゝに記し、兩氏に對して厚くお禮を申述べらる。

叙述したことがらには、それ／＼根據があるけれども、一々それを記すことをさしひかへた。他日もし博士の詳傳を書く機會があつたならば、これらの叙述のよるところを明かにしたいと思つてゐる。

短い期間に急いで筆を執つたので、できるだけ氣はつけたけれども、氣のつかないところに誤謬がありはしないかと、心配してゐる。もしさういふことがあつたならば、これも、他日の機會に訂正したい。